

地域協働型子ども包括支援の実践と価値に関する定性調査：
支援者および利用者へのインタビューに基づいて

認定特定非営利活動法人 Learning for All

東京大学大学院教育学研究科

2024年3月26日発行

執筆担当者

氏名	所属	執筆章
大塚 類	東京大学大学院教育学研究科・准教授	序章 第2章 第3章 終章
小野 裕太	東京大学大学院教育学研究科・修士課程院生	第1章 第3章

目 次

序章 本調査の概略（大塚）	1
序-1 調査の概略	1
序-2 調査方法と対象	2
第1章 地域協働型子ども包括支援における子どもへの提供価値 （小野）	5
1.1 地域協働型子ども包括支援における多様な支援拠点・サービスの 概要	5
1.2 子どもたちにとっての居場所支援拠点の価値	8
第2章 支援者の活動と思い（大塚）	15
2-1 中高生を対象とする居場所	15
2-2 小学生を対象とする居場所	22
2-3 学習支援拠点	27
2-4 地域を担当する SWer	30
第3章 支援を継続するにあたっての難しさと可能性	35
3-1 各拠点運営の観点（大塚）	35
3-2 地域協働型子ども包括支援の観点（小野）	40
終章 本調査のまとめ（大塚）	45
終-1 利用者が受け取っている価値・支援者が考える価値	45
終-2 調査から明らかになったこと	46

序章 本調査の概要

序-1. 調査の概要

東京大学大学院教育学研究科と認定 NPO 法人 Learning for All(以下、LFA と略)は、2021 年 10 月 11 日に教育・研究交流連携事業に関する協定を締結した。本報告は、その協定の一環として 2023 年に実施された定性研究の報告書である。研究の概要は以下のとおりである。

調査地域	LFA の事業が展開している都内のある地域 (A 地域と表記)
調査対象	居場所・学習支援の各拠点の支援者、中高生を対象とする居場所の利用者
調査期間	2023 年 1 月～2023 年 10 月
研究方法	フィールドワーク・インタビュー
研究実施者	大塚 類 (東京大学大学院教育学研究科・准教授) 小野 裕太 (同・修士課程院生)

本定性研究は、居場所や学習支援の拠点を運営しているスタッフと利用者へのインタビューを通して、スタッフが大事にしていること・悩んでいることや、利用者にとっての居場所の意味を描き出そうとするものである。特に、数値等で客観的に示すことが難しいけれども、支援の「現場」で大切にされていることを、スタッフと利用者の生の言葉から描き出すことを目指す。

こうした目標のもと、本報告書は以下の 4 章構成を採る。

1. 地域協働型子ども包括支援 (地域協働型子ども包括支援) において各拠点が子どもに提供している価値
2. 価値を実現するための支援者の活動と思い
3. 支援を継続するにあたっての難しさと可能性
4. 本調査のまとめ

第 1 章では、まず、A 地域における各拠点 (小学 1 年生～3 年生を対象とする居場

所（以下、小学生を対象とする居場所と表記）、中高生を対象とする居場所、学習支援拠点など）の概略を示す。そのうえで、中高生を対象とする居場所の利用者の声から、子どもたち自身が感じている居場所の価値について考える。なお、本報告で使用する「価値」という言葉の定義は、「支援を通じて利用者に及ぼされる有意義な影響や効果」という、LFA 内の定義に準じる。第 2 章では、各拠点の支援者のインタビューを手がかりに、子どもたちの居場所を日々運営している彼らの活動と意思を描く。第 3 章では、本研究のプロセスから明らかになった、支援を継続するにあたっての難しさの可能性について、拠点運営と地域協働型子ども包括支援の観点から考察する。終章では、本調査のまとめとして、利用者が受け取っている価値・支援者が考える価値と、調査で明らかになったことを記す。

序-2. 調査方法と対象

本調査では、8名の支援者に対してインタビューを実施した¹。詳細は以下の表のとおりである。

場所／所要時間	各拠点、WEB 会議システム／約 2 時間
共通質問 項目	<ul style="list-style-type: none"> ・ LFA への就職／転職を決めた経緯 ・ これまで支援した／している中で、印象に残っている子どもや家族 ・ これまで遭遇したピンチや危機と、それをどう受け止めてきたか ・ 日々の支援の中で大切にしていること（特に、一般的には理解されにくかったり、うまく言語化できないことがあれば深掘りして聞きたい） ・ 子どもにとって自分はどのような存在か。また、拠点の中で自分はどのような役割を果たしているか ・ 自拠点が、関わるステークホルダー（子ども・保護者・地域など）に対して発揮している／これから発揮しうる価値は何だと思うか
実施者	大塚・小野

表 1 支援者インタビューの詳細

¹ インタビューの前に、「研究説明文書」に基づき口頭で趣旨説明をし、同意書と不同意書を渡し、署名された同意書を回収している。インタビューは対象者の了承を得て録音し、逐語録を作成した。

インタビューを実施した支援者は以下のとおりである。なお、本報告に出てくる固有名詞はすべて仮名であり、小学生を対象とする居場所を「居場所 X」、中高生を対象とする居場所を「居場所 Y」、学習支援拠点を「学習支援拠点 Z」と呼ぶ。

虎杖さん	A 地域の学習支援拠点 Z の拠点長ののち、別の地域の居場所拠点へ異動 学生時代から LFA でボランティアとインターンをし、別企業に就職したの ち LFA に転職して 3 年目
桔梗さん	小学生を対象とする居場所 X の拠点長 LFA に転職して 4 年目
皐月さん	小学生を対象とする居場所 X の運営スタッフ LFA に転職して 4 年目
山吹さん	中高生を対象とする居場所 Y の拠点長 学生時代から LFA でボランティアをし、別企業に就職したのち LFA に転 職して 4 年目
芝桜さん	中高生を対象とする居場所 Y の運営スタッフ、兼、学習支援拠点 Z の拠点 長 学生時代から LFA でボランティアとインターンをし新卒入社
紫苑さん	中高生を対象とする居場所 Y の大学生ボランティア
海棠さん	A 地域を担当するソーシャルワーカー LFA に転職して 2 年目

表 2 インタビュー対象の支援者の一覧

個別インタビューを補足する観点から、居場所 X と居場所 Y の拠点長とソーシャルワーカー（以下、SWer と表記）による座談会も 1 回実施した²。

居場所 Y の利用者 3 名に対しても、インタビューを実施した（3 名中 2 名は座談会方式）。詳細は以下の表のとおりである。

² その他、各居場所拠点で実施されているケース会議と、中高生を対象とする居場所で月に 2 回実施されているフードパントリーも見学した。

場所／所要時間	中高生を対象とする居場所拠点／約 1 時間
共通質問 項目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 居場所 Y は自分にとってどんな場所か ・ 居場所 Y のスタッフは自分にとってどんな存在か ・ 居場所 Y のいいところ ・ 居場所 Y の改善してほしいところ
実施者	小野

表 3 利用者インタビューの詳細

インタビューを実施した利用者は以下のとおりである。

ハルさん	高校生（利用歴 5 年）	個別インタビュー
アキさん	高校生（利用歴 3 年）	座談会方式インタビュー
ナツさん	高校生（利用歴 5 年）	座談会方式インタビュー

表 4 インタビュー対象の利用者の一覧

続く第 1 章では、A 地域における各拠点の概略を示したうえで、居場所 Y の利用者インタビューに基づき、子どもたちが感じている居場所拠点の価値について見ていく。

第1章 地域協働型子ども包括支援における子どもへの提供価値

本章では、本報告の主題となる地域協働型子ども包括支援モデル（Child Eco System）について、A地域を事例としてその体制や特徴を記述する。

地域協働型子ども包括支援とは、「地域のあらゆるおとなたちのネットワークをつくり」、それを基に支援の必要な子どもを「見のがさず、早期につながり」、「成長段階に合わせ、必要なサポートを6～18歳まで切れ目なく行う」包括的な支援モデルを指す³。ここで主となる要素は大きく2つ挙げられる。1つは地域に住む子どもたちの多様なニーズに応えるための、多様な種類の支援拠点・サービスの提供である。もう1つはLFA内外の様々な資源（LFAが提供する支援拠点・サービスを含む）の間のネットワークの創出である。以下、本章では特に前者について、A地域を事例としてその概要を整理する。

1.1 地域協働型子ども包括支援における多様な支援拠点・サービスの概要

A地域においてLFAが提供する支援拠点・サービスは大きく「学習支援拠点」「居場所支援拠点」「食事支援」「訪問支援」の4つに分けられる⁴。本報告では特に居場所支援拠点について取り上げるが、まずはそのほかの3つの支援拠点・サービスの概要を説明する。

1.1.1 学習支援拠点・食事支援・訪問支援の概略

初めに学習支援拠点についてであるが、本地域においてLFAは3つの学習支援拠点を運営している。その全てが「公民館拠点」と呼ばれ、主に地域の公民館を借りて運営されている。主な提供サービスは週1～2回、1回2～3時間程度の学習支援であり、1拠点あたり15～20名の小学4年生～高校生に対して少人数指導（子ども1～3名あたり大学生ボランティア教師1名）を提供している。指導にあたる教師は主に動画研修や集合研修等を受けた大学生ボランティアであるが、大学生ボランティアのサポートや現場運営は大学生インターンや職員が務めている。本地域の学習支援拠点に通う子どもは、行政のケースワーカーからの紹介で繋がるケースが多く、

³ 認定NPO法人 Learning for All 団体概要資料（2023年12月更新）より

⁴ ただし、「居場所支援拠点」において学習支援を行う場合や、「学習支援拠点」が子どもにとって居場所的な機能を果たしている事例などもあるため、この両者の区別についてはあくまでも組織運営上の区別であることを断っておく。

生活保護受給世帯や母子世帯の子どもが多いことが特徴である。

次に食事支援についてである。食事支援は、大きく「子ども食堂」と「フードパントリー」に分けられる。前者は地域に住む子どもや保護者、地域住民を対象とした無償の食事提供であり、後者は同対象に対しての食料配布である。なお、本地域においては共に居場所支援拠点に併設されるかたちで実施されているため、詳細な説明は居場所支援拠点の説明に譲る。

訪問支援については、本地域において LFA に所属するソーシャルワーカー(以下、SWer と略)によって行われ、様々な事情で支援拠点に足を運ぶことのできない子どもや、LFA が提供する支援拠点・サービスを利用している保護者を対象としている。実施頻度や時間はケースによって異なるが、食事支援の一環として家庭を訪問する際に相談に乗る等、様々な機会を活用して子ども・保護者と接点を持ち続けることで、困り事が起きた際に相談しやすい関係性を構築することを試みている。

以上が「学習支援拠点」「食事支援」「訪問支援」の概要である。以下では本報告の主題である「居場所支援拠点」についての説明を行うが、地域協働型子ども包括支援の一環としてそれぞれの拠点とスタッフが適切に連携を取り合いながら、多様なニーズに応えるべく支援を展開していることは付言しておく。

1.1.2 居場所支援拠点の概略

本地域には2つの居場所支援拠点が存在しており、共に常設型の居場所である。1つは小学校低学年(1年生～3年生)を対象とする居場所 X であり、もう1つは中高生を対象とする居場所 Y である。

・居場所 X

居場所 X においては、居場所支援を含め大きく3つのサービスを提供している。1つ目は小学校低学年の子どもを対象とした登録制の居場所支援であり、週5日(平日)、14時から20時まで開室している。現在登録している子どもは4名で、日によって差はあるが、平均して1日あたり3名の子どもが居場所支援を利用している。開室時間中子どもは主に学習や遊び、食事などをして過ごす。居場所 X ではそれぞれの子どもに時間をどのように使うかが委ねられ、来室時にスタッフと相談しながら時間の使い方を決めるようになっている。また、地域の公園や駄菓子屋等へのお出かけや遠足、季節のイベント等も不定期で開催しており、それらは子どもや保護者、地域住民の協力を得ながら運営されている。居場所 X 自体は拠点長、常駐職

員、専門職員（心理士やSWer等）、学生インターン・ボランティア、地域住民ボランティア等によって運営されている。

2つ目は登録制の子ども食堂である。こちらは週4日（平日）開室しているが、居場所支援を利用する子どもはもちろん、小学1年生から18歳まで利用可能な子ども食堂となっている。

3つ目は月2回開室している非登録制の子ども食堂であり、子どもからおとなまで誰でも参加できるようになっている。両者は共に居場所支援と同様のスタッフ体制で運営されている。

・居場所 Y

居場所 Y においては、居場所支援を含め大きく4つのサービスを提供している。1つ目は中高生および中高生相当の年齢の子どもを対象とした登録制の居場所支援である。週3日（平日）開室しており、開室時間は居場所 X と同じく14時から20時までである。現在登録している子どもは14名で、日によって差はあるが平均して1日あたり8名の子どもが居場所支援を利用している。3階建ての住居を利用して運営されており、1階は子どもとスタッフが少人数で会話する部屋、2階は子ども同士、さらにはスタッフを交えて遊んだり、それぞれが好きなことをしたりする部屋として利用されていることが多い。居場所 Y では時間や空間の使い方が完全に子どもに委ねられており、来室時間内に子どもがしなければいけないこと等は特に決まっていない。また、居場所 Y も居場所 X と同様に不定期で行事やイベント等を開催しており、遠足等で外に出かけるほか、映画上映会や流しそうめん等、居場所 Y の空間を利用した行事もしばしば開催されている。居場所 Y は拠点長、常駐職員、専門職員（心理士やSWer等）、学生インターン・ボランティア等によって運営されている。

2つ目は個別の相談支援である。週1回60分の個別相談が平日の固定曜日に実施されており、居場所支援を利用している子どものうち個別の相談支援を希望する者、および居場所支援を利用していないが個別の相談支援を希望する者を対象に、登録制で実施されている。相談員は拠点長や常勤職員が主に務めている。

3つ目は登録制の子ども食堂である。週5日（平日）、18時30分から20時までの開室であり、拠点長や常勤職員が食事を提供している。

4つ目はフードパントリーであり、非登録制で月に1回希望者（子ども・保護者・地域住民等）に対して食料配布を行っている。居場所 Y の1階および庭を利用して、

レトルト食品や日持ちする食材のほか、提携する NPO から提供された野菜等の配布を行っている。

区分	学習支援 拠点	居場所支援拠点		食事支援		訪問支 援
		居場所 X	居場所 Y	子ども食堂	フード パントリー	
(小区分)	公民館拠点 (3つ)					
対象	小 4～高 3	小 1～小 3	中 1～高 3	小 1～高 3 (登録制) 誰でも (非登録 制)	誰でも	小 1～ 高 3
頻度	週 1～2 日 2 時間～ 5 時間	週 5 日 14 時～ 20 時	週 3 日 14 時～ 20 時	週 4～5 日 (登録制) 月 2 日 (非登録 制)	月 1 回	ケース による
場所	公民館	(住宅)	(住宅)	居場所 XY	居場所 Y	各家庭

表 5 A 地域における地域協働型子ども包括支援の支援拠点・サービス一覧

以上が A 地域で提供されている多様な支援拠点・サービスの概要である。地域協働型子ども包括支援においては、子どもの学びや育ちを保障する上で重要な食事・学習・居場所など様々なニーズに対して応えるべく、拠点やサービスの内容を多様化しながら、誰ひとり取りこぼすことのない包括支援体制の構築を目指している。次節では、特に居場所 Y に着目して、これらの拠点はどのような価値を有しているのかを、子どもたちの視点から整理する。

1.2 子どもたちにとっての居場所支援拠点の価値

本節では、居場所 Y を利用している子どもに対するインタビュー（詳細について

は序章を参照) のデータを元に、子どもたちにとって居場所 Y がどのような価値を有しているのかを検討する。

1.2.1 気を遣わずに過ごせて、話を聞いてもらえる場所

子どもたちにとって、居場所 Y は何よりもまず様々な他者と関わる場である。居場所 Y は学年や年齢が異なる子どもたちやスタッフが共に時間を過ごす場であるが、そこに上下関係はなく、気を遣わずに自分らしくいられる場でもある。座談会インタビューの中で、アキさんは「あまり上下関係がないというか、年下、年上関係なしに、みんなタメ語を使っている。敬語を使っている子どもなんて誰もいないんじゃないかなというぐらいです」⁵と語る。

ナツさんは、平日の仕事終わりに「不定期に」、そのときの「感覚……気分、時間があれば」居場所 Y に足を運ぶ。そのように気が向いたときにふらっと立ち寄れる気楽さがあるのが、居場所 Y なのだろう。また、居場所 Y ではスタッフも利用者也ディスコード⁶に登録し、雑談のスレッドが「24 時間動いている……それはいいなと思った」、とナツさんは語る。オンラインでの繋がりが、オフラインでの居心地の良さに繋がっているのだろう。

こうしたおとなも子どもも気を遣わないでいられる居場所 Y の特別さについて、ハルさんは次のように語る⁷。

やっぱりおとながいて、子どもがいて、みたいな感じの場所は結構レアじゃないですか。……そんな中で、気を遣わなくていい場所って結構珍しいなって思っています。学校でも、先生には先生としての地位があるから、やっぱり気を遣わないといけないじゃないですか。けれど、ここ [=居場所 Y] はみんな違って、みんな友達で、みんな気を遣わない空間だからこそ、すごく居場所として居心地がいい。

ハルさんにとって、居場所 Y は多様な人々が集いながらも、気を遣わずに過ごせる場所である。また、居場所 Y における人々の間の横の繋がりは、子どもたちが学

⁵ 本報告では、本文中のインタビューデータからの引用を「 」で示す。また、強調体にすることで本文と差異化する。引用文中の「……」は中略、「[]」は引用者による補足を意味する。

⁶ ディスコード (Discord) とは、PC やスマートフォン等でメッセージの送信や通話ができる SNS のことである。

⁷ 長文の語りを引用する場合には、本文とのあいだに余白を空け、強調体にすることで本文と差異化する。語りの途中まで引用する場合には、文末に読点を付けない。

校や家庭において直面しているしんどさを吐露する土壌にもなる。そうした場は自分にとってまさに「居場所」であり「第2の家」になっている、とハルさんは語る。

やっぱYの名目にもなっている「居場所」というのはすごい自分にとって感じる部分です。……中学2年生の時〔＝ハルさんが居場所Yに通い始めた学年〕って、学校にも行けなくて、友達と遊ぶというのがなかったの。そんな中、対複数人で話すという、自分にとって〔居場所Yが〕新鮮な場所になって、楽しかったこととか、逆に今しんどいこととかを話せると、絆が結構できるじゃないですか。……そんな中で、やっぱり自分の成長にもなって。今となっては本当に、かけがえのない、第2の家みたいな。

アキさんにとっても、居場所Yは自分の話したいことを聞いてもらえ、認めてもらえる場所である。「学校とかだと先生とかみんなとか後輩とか、忙しいかなとか気を遣っちゃうんですけど、Yの人はそれが仕事みたいな感じだから、やっぱ話しやすいかな」と語るアキさんは、自分の話したいことがあったらとりあえず居場所Yに足を運ぶとのことだ。そうした場所は今の子どもたちにとってとても重要な場所だと思う、とアキさんは語る。

私はやっぱりYに会話しに来ているというところがあるので、やっぱりおとながいて認めてくれる人がいて、仲良い子とかもいて、話しやすい、話を聞いてくれるおとながいるというのはすごくいいなと思います。いいところ。やっぱりいまの子どもたちというか、おとなに話を聞いてもらうという機会があまりないと思うので。それがあるのとないのとでは、たぶんちょっと今後変わってくると思っています。認めてくれるおとながいるというのは、すごく大事なことだと思っています。それが体験できるYというのはいいところだなと思いました。

話すことが好きなアキさんは、居場所Yに来る前は「いつもは独り言だった」発話で、「聞いてくれる人がいるだけで、会話に昇格する」と語る。彼女にとって、話を聞いてくれる他者の存在そのものが居場所の価値の1つであると言えるだろう。

しかしながら、しんどさや気持ちの吐露は、単に横の関係によって可能になっているわけではない。居場所Yにはそれぞれのしんどさに直面している子どもたちが通っており、「自分と似た環境に居合わせている子ども」だからこそ話して繋がるこ

とができるという側面もある。そうした繋がりの中で、子どもたちの中でも様々な変化が起こる。ハルさんにとってそれは「学校に対するイメージ」や「他人に対するイメージ」の変容であった。

子ども側で、結構同じ環境に居合わせている子どもが多いと思うんです。やっぱり学校に何かしらで行けていないというのがあって、まずそこで話せることが1つあるじゃないですか。それで仲良くなったら、次は、学校にいいイメージがなかったら……より学校に行けないと思うんですけど、その中でこんな場所に来ると「人っていいイメージがあるんだな」って気づけると思うし。自分は今までこういうこと〔＝自分の意見を率直に伝えること〕できなかつたけれど、次行ったら「これはやめて欲しい」って言えるとか。人と話すことによって、自分の中のいいことをどんどん増やせる機会になるので、それはたぶんYに来ないとなかなか難しい。本当に俺、たぶんYに来ていなかったら、それこそ学校にも今行けているか分からないですし。人の暖かさから、学校に行けていない子どもとか、いじめられている子どもとかも、たぶん勇気をもらって。今まで言えなかつたことを直接言ったら、環境が変わる可能性もあるわけだから、それが大きいんじゃないですかね。

ハルさんは、居場所Yにおける関わりの中で「学校に対するイメージ」や「他人に対するイメージ」を変容させていき、それを足掛かりにして自らが置かれる環境や状況を変えるための主張を行えるようになった。次項では特にこのような「主張が可能になる」ことに着目し、「やりたいことを表明し、認めてもらう」場としての居場所の価値を見ていく。

1.2.2 「やりたいこと」を表明し、応援してもらえる場所

横の繋がりの中で少しずつ癒されていく中で、子どもたちは徐々に自分たちの「やりたいこと」を表明することができるようになる。居場所Yに通い始めた当初は自分の「やりたいこと」を表に出すことを躊躇していたハルさんは、周囲の皆がそれぞれ自分の「やりたいこと」に前向きな姿勢を見せていることに感化され、自分からも「やりたいこと」を発信するようになったと語る。

〔自分の成長の中で〕一番大きいのは、自分は昔ノリがめっちゃめっちゃ重くて、今は結構軽いんですけど。何をするにも「いやあ、俺はいいよ」みたいな感じだったん

ですけど、Yに入って〔2~3年目の〕、高校1、2年生ぐらいから、みんなが乗り気だから、自分のそのペースに乗っかっていく機会ができて。そこから、自分発信で何かしたいって言い出すこともありました。

居場所Yには、子どもから発信された「やりたいこと」をみんなで応援し、実現するための手助けをする文化がある。例えば、初めてハルさんが発信した「やりたいこと」は花火大会であったそうだが、それは居場所Yの中で実現され、その後毎年の恒例行事になったとのことだ。「やっぱり自分がしたいって言ったことに、みんな賛成して、人数が集まって何かができるというのは、自分はすごい好きなので、居場所Yはそういう面ですごくいいところですね」とハルさんは語る。

アキさんにとっても、居場所Yは自分の「やりたいこと」を全力で応援してくれる場である。作曲活動を行っているアキさんは、居場所Yのスタッフや子どもたちに自分が作った曲を聞いてもらい、承認してもらえることが自分にとってとても大切なことだと語る。

やっぱり話を聞いてくれる大事な人だなって。認めてくれるみたい。自分が音楽作っているんですね、4年間ぐらい作曲していて。それを聴いて「日に日に上手くなっているね」とか、すごい認めてくれて。それが本当に自分の大事な自信になっているので、本当に大事な存在ですね。職員さんとか「すごい」って言ってくれて、他に来ている子どもとかも、たまに聴いてくれます。「すごくいいね」って言ってくれます。

このように、居場所Yにはお互いの「やりたいこと」を認め、応援する文化がある。そうした文化のもとで、子どもたちの声から様々なイベントや行事が立ち上がり、居場所Yの中で実現されている。ハルさんは、そうしたイベントや行事が、実は居場所Yの中で最も大事なもののなのではないか、と語る。

〔居場所Yの〕大事なアイデンティティーじゃないけど、Yの方針が、子どもに寄り添うということをやっているから、子どもの意見をすごく大事にしているんですよ。イベントとかは基本子ども中心に、どんどん企画を作っていくって、本締めとかサポートを職員とかスタッフがやることが多くて。……例えば自分がバスケットボールの大会やりたいってなったら、……自分の望みを全て叶えてくれるような環境

を作ってくれて。本当に、Yの中で一番大事にしていることかもしれないです。イベントと、あと行事。

以上のように、子どもたち自身の「やりたいこと」の表明は、それを承認し応援する居場所Yの文化に支えられている。さらにはそうした「やりたいこと」が居場所Yにおいて実現されることで、いっそう「やりたいこと」を表明しやすい文化の醸成に繋がっている。

本節ではこれまで場全体としての居場所Yの価値に着目してきた。次項では、そうした居場所Yの価値を支える関係性の1つである、子どもたちにとってのスタッフの存在に着目する。

1.2.3 スタッフとの出会いと関わり

話したいことがある時に居場所Yに足を運ぶアキさんは、拠点では普段「職員さんとかと会話していることが多い」という。比較的多く会話するのは、居場所Yの拠点長である山吹さんらしく、筆者が居場所Yに何度か足を運ぶ中でも、彼女が作った曲や最近のアーティストについての話を山吹さんとしているところを目にしたことがあった。漫画やゲームの話に加え、「学校であったこととか、最近忙しいんだよねとか、家に居づらいんだよねみたいなこととか、……今こういうことをしているとか」を話すことの多いアキさん。話を聞いてもらい、承認してもらえる相手がいることは、彼女にとって大きな意味を持つのだろう。ナツさんも、自身の結婚観などプライベートな話をスタッフとすることが多いそうだ。

ハルさんにとっては、银杏さんという退職したスタッフの存在が大きかったようだ。ハルさんは彼のことを「言い方悪いですけど、ダメなおとな」と親しみを込めて語るが、それは彼がハルさんの「他人に対するイメージ」、特に「おとなに対するイメージ」が変容するきっかけになったからだ。银杏さんは自分が変わる第一のきっかけだった、とハルさんは語る。

自分の中ではそうなんですけど、おとなってやっぱり子ども側からすると、お堅いじゃないですか。……けれど、その俺の中の考えを全部ぶち壊して、新しい見方っていうのを作ってくれて、银杏さんが。だから自分が変わる第一のきっかけでもあったし、おとなに対する俺の解釈を、いい存在に変えてくれた一人でもある。

ハルさんは、銀杏さんの「ダメなおとな」のエピソードとして、退職後の銀杏さんを招いて居場所 Y で開催した野球大会の話をしてくれた。「ザ・子ども、みたいな感じ」の銀杏さんは、「本当に一生懸命野球をやっていて、1 塁か 2 塁に走るところで、思いっきりスライディングをした」のだが、「その時に思いっきり小指を骨折した」のだそうだ。ハルさんにとって銀杏さんは、自分のやりたいことに全力で乗ってくれるおとなであり、友達のような存在である。そんな銀杏さんとの出会いは、ハルさんがおとなに対してもう一度肯定的なイメージを持てるようになったことに繋がっているのだろう。

もちろん、現職のスタッフの存在もハルさんにとっては大きいようだ。例えば拠点長の山吹さんについて、彼は「何かいいおとなの例って感じがする」と語る。

ブッキー [=山吹さんの愛称] のイメージはやっぱり銀杏さんとは違って、ちゃんと真面目な部分もありつつ、子ども心を忘れていなくて。何かいいおとなの例って感じがするんですね。仕事もすごいできるし、話を聞くのもすごく上手だし。やっぱり、ブッキーリスペクトはやばいですね。

また、彼にとってボランティアの紫苑さんは考え方が近いこともあり、「すごく気が合う」「本心で話せる相手」で、「今の Y の中だったら一番好き」な相手である。さらに別の男性スタッフの水仙さんについては、「同性で結構、自分の趣味とかも合う」ので、普段最もよく話すそうだ。「入った時からずっと物腰いいし、すごく取っ掛かりやすい」水仙さんのことを、彼は「すごい子どもに熱心だし、ちゃんと自分の考え方っていうのもしっかり持ってて、いいなって思う」と語る。

ハルさんのインタビューからは、彼が居場所 Y のそれぞれのスタッフと多様で豊かな関係性を取り結んできていることが伺える。このように、様々なおとなと出会い関わる中で、多くのものを得られることは、居場所支援拠点における価値の 1 つだと言えるだろう。

第2章 支援者の活動と思い

前章第2節では、拠点を利用している子どもたちが実感している拠点の価値について描いた。続く本章では、A地域における各拠点の支援者の語りを手がかりに、そうした価値の実現を支えている支援者の活動と思いについて見ていく。前章との繋がりを鑑み、第1節で中高生を対象とする居場所、第2節で小学生を対象とする居場所、第3節で学習支援拠点、第4節で地域をまとめるSWerについて取り上げる。

2.1 中高生を対象とする居場所

本節では、印象深い子ども、日々の支援の中で大切にしていること、支援者の役割、提供している価値の4項目について、拠点長の山吹さん、スタッフの芝桜さん、ボランティアの紫苑さん、SWerの海棠さんの語りから描く。

2.1.1 印象深い子ども

山吹さんは、印象深いエピソードとして、ある男子高校生の変化を挙げた。通い始めた当初中学2年生だった彼は、いろいろとウソをつかざるを得ない状態のように見えたという。人に言えない闇バイトをして何十万の財布を買った、などと語る彼に対して、山吹さんをはじめとする当時のスタッフは、「先生みたいに叱るのはたぶん違うよねっていうような話をして、……見守るみたいな選択をした」。その結果、ウソをつかなくても自然にその場にいられるようになり、財布についても中古店で安く買った、などと言えるようになったという。彼のウソをめぐるその後のやり取りについて、山吹さんは感慨深そうに次のように語ってくれた。

前ウソ言ってたよねみたいな感じの話をちらっとしたら、あの時はすごく自分を大きく見せたかったしみたいな、でも別に今もウソついちゃう時があるから全部なくなったわけではないけど、Yの人たちがそういうふうに、何事もなかったように接してくれてて、……こんな俺でも受け入れてくれるんだみたいな安心感に、その時すごい繋がったっていうふうに言っていて、なので、だから逆に上からわーって言ってたら、彼からその言葉は出てこなかったんだろうなっていうふうに思ったので、それがほんとに一番っていうか、最初にYに来た子がめちゃくちゃ変わったじゃないですけど、みたいなところすごく印象的でした。

山吹さんをはじめとする居場所 Y のスタッフは、学校の教師や保護者のように子どものウソを指摘して叱るのでも、ウソを信じる態度をとるのでもなく、「見守るみたいな選択をした」。スタッフのそうした態度が、受容されているという感覚や安心感に繋がり、子どもは虚勢を張るためにウソをつく必要がなくなった。時間をかけて見守ることで子どもの自然な変化を促す、という支援のスタンスは、居場所 Y の日々の支援の中で大切にされていることにも繋がっている。

2.1.2 日々の支援の中で大切にしていること

学習支援の現場から居場所支援に来た山吹さんは、「何もしない」「先出ししない」ことを居場所支援では大切にしている、と語ってくれた。

何もしないっていったらちょっと変ですけど、学習支援は何かを価値を与えるみたいな感じのイメージが私の中であるんですけど、〔居場所支援は〕そうじゃなくて、子どもたちとの1対1だったりとか、複数の中での関係性の中から、日常の中から何かができたりできなかつたりとかっていう経験を自然にくり返して行って、子どもが勝手に成長してくって言ったらちょっと変ですけど、子どもが勝手にそこから自分の人生の壁みたいなのにぶつかって、それを子ども自身で乗り越えていく。……この子はこれできてないよねっていうのを確認はしつつも、それが他の子どもたちとか過ごす中で、「まずいな」みたいな、「自分が変わりたいな」とかっていうふうに思うタイミングとかが出てくると思うので、そういうふうにその子のニーズがあらわになった時に、「じゃあ一緒にできること考えてみる？」みたいな感じに、「先出ししない」っていうのが一番じっくりくるかなと思うんですけど、そういうかたちですかね。

居場所 X と居場所 Y それぞれの拠点長と SWer が大事にしている支援のスタンスについては、個別インタビュー後の支援者座談会でも再度話を聞いた。居場所 X の桔梗さんは「余白の時間」を、SWer の海棠さんは「苦労を奪わない」ことを、大事にしていることとして挙げている（詳細は後述）。この座談会での対話を受け、山吹さんは、三者の共通点に触れながら、「何もしない」についてさらに以下のように具体化してくれた。

「苦勞を奪わない」みたいなところと、「何もしない」も、……見守ってるっていう感じだと思うんですけど、その子のことについてはすごい考えるし、こうだと思っからみたいなの、その子に関してすごい思いを馳せるけどみたいなの、別に手出しはしないみたいなの。はたから見たら、たぶん何もしてないように見えるけど、……私たちが代わりに向き合ってもそれは別に子どもの人生ではないかなっていうふうにはすごい思ってるので、……その人の困りは自分で受けてもらって、それを受け止め切れなかったら周りの人が支えるよっていうので、なんかその支える代用を作っておく、その「何もしない」時間を一緒に過ごしたりとか、「余白の時間」を一緒に過ごすことで、こぼれた時に受け止めておける掘みたいなのを作っとくみたいなの感じのイメージなのかなってすごい思いました。

…… [3人それぞれ] 発してる言葉が違うだけで、根底はたぶん一緒なところなのかなという気はなんとなくしてて。でも、拠点によってやっぱ、拠点とか人によって出方は違うみたいなの感じかなっていうふうには思うんですけど。こういう時間が、一緒にだらだらする時間とか、ただ横にいるみたいなの時間がやっぱ大事なのかなっていうふうにはすごい思ってる。それは、いわゆる「余白の時間」なのかもしれないし。そんなカツカツ詰め過ぎて真正面から向き合ったら出てこないことが、やっぱ「何もしなくてもいい」っていうふうには思える空間で、ただ隣にいたり、同じ場にただ一緒にいるっていうのだけで育まれるとかはすごいあるのかなと思ったので、なんかすごい [ふたりが] 言ってることはめっちゃ分かるなって感じですかね。

山吹さんのいう「何もしない」は、文字通り何もしないことではまったくくない。子どもが自分の人生を受け止めきれなくなったときにいつでも支えられるように、「その子のことについてはすごい考え」ながら見守り、ゆったり一緒に過ごす時間を積み重ねることによって、子どもがSOSを出せるような信頼関係を育てている。

他方、現在も学習支援と居場所支援のどちらにも携わっている芝桜さんは、山吹さんが大事にしている「何もしない」スタンス、「まず意図的に意図を持たないみたいなの、特にYとかだと、自分も自然体でいるみたいなのところを重視して」いるスタンスに触れた際、「これでいいの自分みたいなの、そういうところの戸惑いとかもすごいあった」と語った。「子どもに対して理想状態を描かない関わりみたいなの初めてだったので、すごいびっくりというか、これでいいんだというか、こういう関わりもあるんだみたいなのポジティブな気付きですけど、めちゃめちゃ、すごいびっくり

しました」。芝桜さんのこの語りからは、学習支援拠点と居場所拠点の支援者のスタンスの違いの大きさがうかがえる。そのうえで芝桜さんは、居場所支援の中で大切にしていることについて、以下のように語ってくれた。

弱さを認めるっていうか、それ一番大事にしているところかなっていうのは思いません。できないからできるようになろうとか、そういうことよりかは、できないことを受け入れてどう生きていくかっていうのを、私はもちろん考えるし、子どもと一緒に考えたいっていうのを一番大事にしているかなっていうのと、あとは、最後は子どもが決めるっていう、本人の主体性みたいなところ、平たく言うとそうなんちゃんですけど、そういうところはすごい大事にしたいっていうふうには思いません。……その子にとってどう生きるのがいいかって、やっぱり私には分からないし、そういう、人がいる分だけその正解というかがあると思うので、それは最後本人に委ねるっていうところと、本人の思いを最大限尊重するっていうところは、自分ですごい気を付けたいっていうふうに思っているところですかね。

学習支援拠点での「子どもに対して理想状態」を描く関わりは、芝桜さんの言い方を借りれば、強さを求める関わりだと言えるだろう。他方、居場所 Y での芝桜さんは、その子の「弱さを認める」、つまり、何かができないその子の今のありのままをひとまず受け入れようとする。そのうえで、「できないことを受け入れてどう生きていくかっていうのを、私はもちろん考えるし、子どもと一緒に考えたい」と語る。2-1-1 で山吹さんが語ったエピソードをふまえれば、支援者が子どもの弱さを認めることで、子どもはありのままを受け入れられていると感じ、自分から変わっていくこともあるだろう。つまり、その子のいまの弱さを認めることが、逆に、その子が結果的に弱さから脱する支援になりうることもあるだろう⁸。

2.1.3 支援者の役割

上述のように「何もしない」ことを大切にしている山吹さんは、共通するスタンスから、支援者の役割について複数の観点を挙げた。

居場所拠点を利用している子どもたちは「こうしたい、ああしたい」という思いを「否定されたりとか受け入れてこられなかったから大変になっちゃってる」。だか

⁸ もちろん、芝桜さんが想定している「弱さ」が本当に弱さなのかどうかを、支援者たちと共に考える必要があるだろう。本調査の今後の課題としたい。

からこそ、「どんなに社会から見てあほくさいような意思でも、なんかそれはすごい尊重、ここ [=居場所 Y] ではしてあげたいなっていう感じですかね」、と山吹さんは語る。子どもたちが自分の意思を素直に出せるために、山吹さんは、「出しゃばらないもそうだし、一緒にだらだらする……ほんとに先生みたいな感じじゃなくて、一緒に『面倒くさいよね、これね』みたいな感じの話をするってできる、ゆるっとグチを言えるお互いの関係性みたいなのをすごい意識してる」。このように支援者と利用者のゆるい関係性を大切にしている山吹さんは、「～し過ぎない」という表現を多用しながら、支援者のスタンスについて語る。

これは行き過ぎだなみたいな感覚とかは常に持ってやっているんで、一線を越えないように、入り込み過ぎないように……必ず本人の意思があって、それに添うかたちで行うっていう感じかもしれないです。自分の意思を乗せ過ぎないというか。……必要だと思ったことはやるので、引いてはない、……たたずんでるように見せかけて支えてるみたいな感じのイメージかなと。たぶん本質は支えとか、補助輪みたいな感じだと思うんですけど、それを感じさせないように居ようみたいな。

子ども本人の意思を中心に据え、支援者はあくまでも、それがあつことさえ気づかれないような補助輪の役割に徹する。補助輪があれば自転車は決して倒れないように、支援者のさりげない支援に支えられて、子どもたちは、決定的な危機に陥らずに日々を暮らしていける。さらに、山吹さんは、子どもと支援者の関係だけではなく、子ども同士を繋ぐことにも心を砕いている。

信頼できるおとながいるっていうのは結構大きなことだと思うので、……〔最初は〕ニコニコして「ウエルカムだよ」みたいな感じですけど、だんだんそれをちょっと手放して行って、子どもに渡していくみたいな。何か共通の趣味がある子たち同士にちょっと投げてみたりとか、「誰々、これ教えてくれる？」とかって言って、自分はその場を離れてみたりとか。最初は〔主導権を〕スタッフが握ってるかもしれないけど、それを他の子だったり、場に手渡ししていくみたいなイメージは、私は結構強いかなと思いますね

子どもとの関わりの主導権を「他の子だったり、場に手渡ししていくみたいなイメージ」もまた、補助輪としての支援者のスタンスに通じる。子ども同士の繋がり

を育むことは、次項でみていく居場所Yが利用者に提供している価値とも密接に関係している。インタビューでは、利用者に提供している（と支援者自身が感じている）価値として、スタッフから様々なことが語られた。その中から、本報告では、「子どもたちが、居場所Yで支援者に見守られながら、子どもたち同士の繋がりの中で不登校から脱していく」ことに注目したい。

2.1.4 自拠点が子どもたちに提供している価値

SWerの海棠さんは、居場所Yが子どもたちに提供している価値について、第三者的な立場から次のように語る。

いろいろ学校とか家庭とかで傷ついた子どもたちが癒やされる場として、……回復していく場として、すごくそこに価値があるなと思っていて。それも自然と回復してくところに良さがあって、スタッフが意図的に何かをするんじゃなくて、スタッフはほんとにだらだらしてて、子どもたちがやりたいってことを一緒に手伝ったりとかはもちろんするんですけど、一緒にゲームしてたりとか、一緒に寝っ転がってたりとか、一緒にだらだら過ごすみたいな中で〔子どもたちが〕回復してく中で、自分たちのやりたいこととか何か出てきた時に、〔スタッフが〕そこに一緒に乗っかってって、一緒に楽しんでくみたいな。その中で回復ってすごいなと思ってて。

居場所Yを利用している子どもたちは、「ヤングケアラー」だったり、家庭や学校で「我慢しなきゃいけないみたいな中で」過ごしてきており、「ああしたい、こうしたいっていう、その前の段階だった感じがする」、と海棠さんは語る。そうした彼らが居場所Yでの日々の中で癒され、「甘えられるようになったっていうか、……わがまま言えるようになってきて、その中できつと、『こうしたいかも』とかっていう気持ちとか意欲みたいなのが、今までたぶん抑圧されてきた中で、あんまり考えもしなかったことが出てきたり」しているという。

子どもたちが癒され、自分のやりたいことに次第に目を向けられるようになるのは、居場所Yが結果を急がない場であるからだ、ボランティアの紫苑さんとスタッフの芝桜さんは語る。

そうじゃなくて〔=速やかな結果を出さなくて〕いられる場所というか。だから、待っていられるというか。……だから、結論を出さないってことです。待とう

っていう、そのうち何とかなるかもしれないし、そのうち答えが見つかるかもしれないし、見つからないかもしれないし的なのは、たぶんYでもすごい、わからないですけど、あると思ってる。……答えを出さずに待てる感じっていうんですかね、やっぱり。……やっぱり卒業がある以上、ある程度答えを見据えなきゃいけないんですけど、とはいえ少なくとも僕はあんまりそれは求めてないし、求めてないような僕が居られるぐらいには、たぶんそこがあまり考えずにいられるというか、それがすごい大事なことだなと思ってます。(紫苑さん)

Yっていう場は、今日これをして明日子どもがこう変わるとかそういう場所じゃないと思うので、もうちょっと長期的に見て、今ですごく悩むっていうよりかは大切にしている関わりを続けて行って、2年後3年後とか彼女〔＝現在中学生の利用者〕がY〔を〕卒業するときに、もうちょっと生きやすくなったらいいみたいな、そんな感じのことを今考えてます。(芝桜さん)

日々の生活の中で少なからず傷ついてきた子どもたちは、すぐに結論を出したり、明日変わったりすることが求められないYという居場所で、支援者や他の子どもたちと一緒にだらだらしながら、ゆっくりと時間をかけて癒やされていく。そうして癒やされて、はじめて、子どもたちの中にやりたいことや、何かをやろうとする意欲が育まれてくる。そうした子どもたちのやる気を刺激するのが、自分よりも居場所Y歴の長い子どもたちだと山吹さんは語る。支援者たちが意図的に創り出している「待ってられる」場で、子どもたちは、子ども同士の繋がりの中で、自分よりも経験の長い子どもたちをロールモデルにしながら次第に変化していく。

強いて言うなら充電ができてるのかなっていうふうには思っていて。いろいろ疲れちゃったりとか、他から期待かけられてそれに応えられなかったりとか、自分で自分に期待かけてそれがだめだったとかっていう挫折の経験を、あの年齢ならいっぱいしてきた子たちだと思うので。Yってこれができなきゃいけないとかってことは一個もないので、「ただそこにいればそれだけでいいよ」みたいな、「みんなが好きなことしたいんだったらしてもいいし」みたいな感じなので、たぶんここに来て、「別にこれでもいいんだな」っていうふうに思えたうえで、何か頑張ろうかなっていうふうに思えたときに、そういうロールモデルみたいな近くに居る子たちが楽しそうにしてるとかというのを見て、「何か自分も頑張れるかも」みたいな感

じで、そこから勇気をもって本人自身が頑張るみたいなのが、良いサイクルみたいな感じで回ってるのかな

事実、ロールモデルになる子どもが定時制高校に進学することを選び、学校に楽しそうに通っている姿を目の当たりにすることで、他の子どもたちも同様の進路を選び、居場所 Y ではほとんどの子どもが不登校から脱したという。同様に、ロールモデルになる子どもがアルバイトに精を出している姿を見て、多くの子どもがアルバイトを始めているという。山吹さんが大切にしている子ども同士の繋がりや、おとなと子どもの関係だけでは生み出せないような相乗効果を、子どもたちの間に生み出している。

2.2 小学生を対象とする居場所

本節では、印象深い子どもと家族、日々の支援の中で大切にしていること、支援者の役割、提供している価値の 4 項目について、拠点長の桔梗さん、スタッフの皐月さん、SWer の海棠さんの語りから描く。

2.2.1 印象深い子どもと家族

小学生を対象とする居場所 X の立ち上げ当初から携わっている桔梗さんは、印象深い子どもとして、現在は中学生になっている子どもを挙げた。少し長くなるが引用したい。

全然約束を守れないとか、時間になっても来てくれないとか、……そもそも時計が読めないから時間守れないみたいなのところもあったりして、本人が、じゃあ時計読めないんだったら一緒に読めるようになろうみたいな、もうほんとにちっちゃいところから一緒に課題をクリアしていったお子さんで。

その子で印象に残ってるエピソードとしては、字がすごく上手で、そこを大学生ボランティアが見つけてくれて、すごい上手だねって褒めたら、もっと書くようになって、拠点スタッフの中で書道をずっとやってる方がいたので、じゃあその人に教えてもらおうって、ちょっと習い事化して一緒にやって、字がどんどん上達していく中で、何かもっと難しい漢字でみたいなの、次は文章を書けるようになりたいって、本を読めるようになりたいって言って、最終的に国語が好きみたいなの、全然勉強しなかった彼が自分でノート出して、漢字をきっかけに勉強したいっていう

思いが出てきたのは、すごく本人が頑張っていたのもあったし、私たちがそうですけど、ご家族がほんとに、マフユ君っていうんですけど、……家庭とXと一緒にあって、その子を支えたりとか励ましたりとかっていうのが一緒にできたっていうのが、すごく私の中では印象に残ってます。

約束や時間を守れないことは、一般的に、学校や家庭において「課題」と認識されやすいふるまいであるため、これまでマフユ君がおとなからしばしば叱られてきたであろうことが推察される。だからこそ、「自信がなかったり」という彼の在りように繋がったのだろう。しかし居場所Yには、マフユ君が時間が守れないのは時計が読めないからであることに気づき、時計を読めるように一緒に勉強するなど、「ほんとにちっちゃいところから一緒に課題をクリアして」くれる支援スタッフがいた。時計が読めるようになることは、いわばマイナスをプラスにする働きかけである。しかしさらに居場所Yでは、上手なマフユ君の字をさらに上手にするという、プラスをさらにプラスにする働きかけが行われている。こうした働きかけにより、マフユ君は自信をつけ、彼自身の中からやりたいことがどんどん出てくることになった。

こうしたマフユ君の変化を家族がポジティブに受け止め、彼を「支えたりとか励ましたりとかっていうのが〔支援スタッフと〕一緒にできた」という点が、小学校低学年児童を対処とする居場所Xに特有の家族との関わり方である。マフユ君は、居場所Xを卒業してからも、食事支援には登録をし続けたため、桔梗さんと彼の母親は4年以上にわたって関わり続けている。母親が家庭の事情で3ヶ月拠点に来ることができず、久しぶりに再会した際、桔梗さんは、「会えたことといろんな感情が混ざって『お母さーん』って泣い」てしまったという。そこで初めて、桔梗さんは、自分が「仕事っていうところを超えて感情が混ざるぐらいちょっと心配はしてた」ことに気づいたそうである。

この再会の場面に居合わせたというSWerの海棠さんは、「子どももお母さんもすごく抛り所になってるんじゃないかなと思ってて……〔Xが家庭の〕支援において重大な役割を果たしてる気がして」と語っている。「お母さんとここまで繋がれてるっていうのが、僕すごいなと思ってて」と海棠さんが語るように、何らかの困難を抱える子どもや家庭を支援する際に、大きなハードルになるのが、保護者との関係であろう。小学校低学年児童を対象としている居場所Xでは、帰宅の際に保護者が迎えに来るため、支援スタッフと保護者は立ち話程度の会話を交わすことが多い。また、マフユ君のエピソードのように、支援スタッフと保護者が一緒になって子ど

もを支えるという関係も結びやすい。こうした保護者と支援スタッフの日々の関わり合いの積み重ねが、両者の信頼関係に繋がっているのだろう。

2.2.2 日々の支援の中で大切にしていること

日々の支援の中で大切にしていることとして、桔梗さんは、「余白の時間」と「自分も相手も大事にする」ことを挙げた。

Xは余白の時間みたいなものをすごく大事にはして、学校でもなじめなかったり、おうちでもちょっとうまくいかないと思うような子たちが、何も考えずに自分の好きなことがやれるとか、暇でいいっていうこと自体も、結構うち、それはそれで考えなくていい時間として大事にしているので、その余白は、言葉にはしてないですけど、大事にしている部分かなと思います。

小学校低学年でも何も考えない時間が必要だと感じているのか、というインタビューの問いに対して、桔梗さんは次のように応えてくれた。「子どもたちと話していると、すごい切羽詰まったような話し方だったりとか、わーって自分の意見がどんどんあふれてきちゃうとか、人の話さえぎってまで話してくるとかっていうのは結構あって、それを受け止めてくれるお皿が彼らには少ないか、おうちの中ですごいちっちゃくなってるか、かなと思ってて」。だからこそ、居場所Xでは「その子どもたちを受け止める大きなお皿」、つまり、子どもたちの思いを「受け止める時間」を意識してたくさん作っているという。「困難度の高いお子さん」が増えている現状の中で、「そういった子が、Xで頑張らない時間を持つとか、別に何も考えなくていい時間もあっていいし、別に勉強嫌だったら『やだー！』って叫び散らかす日があっても別にいいかなと。『そういう日なんだね』っていう。その子のありのままを受け止めれるおとなの余裕だったりとか、その子がさらけ出せる場の雰囲気だったりっていう意味の『余白』を居場所X全体として意識しているという。

「余白の時間」がおとな側の心がけであるのに対し、「自分も相手も大事にする」ことは、Xという場が「持続性」を備えるために、関わる全員に大切にしたいことだと桔梗さんは語る。「支援者、被支援者っていう、立場上そうだけど、なんか別にそこに感情のやりとりがあってもいいと思うし、貸し借りし合っても別にいいじゃんみたいなどころあるので、そういう関係性でありたいなと思った時に、やっぱり自分も大事にしつつ相手の意思も大事にする、相手のことも大事するっていう、

そこがきちんと守られた上でその関係性だよなっていうので、ここは割と意識して
ます」。「自分も相手も大事にする」ことを子どもたちに特に考えてもらう契機が、
居場所 X で実施するイベントを彼らが考えるときだという。「そのイベントが、自分
だけが楽しいイベントになってるんじゃないかと、一緒に参加するみんなで楽しめる
ものになっているかなみたいなのを、子どもたちと 1 個ずつ確認をしながらやって
いきます」。

支援スタッフと子どもたちが横の関係を生きられる場だからこそ、子どもたちは、
おとなに大事に庇護されるだけでなく、自分も対等な存在としておとなや他の子ど
もたちを大事にするという意識を持ちやすいのではないだろうか。

2.2.3 支援者の役割

居場所 X における支援者の役割として、桔梗さんは、「ナナメの関係」について語
った。

X は結構年齢層が低いお子さんが多いので、完全に横の関係ってよりかは時折ナナ
メになったり横になったりみたいなのをくり返しながら、でも「こうしなさい」と
は言わないけど、「こうしたほうがうまくいくんだと思うよ」みたいな。……そうい
う関係性になったりはするかな。時折スタッフと子どもでケンカすることもあるし。
たまに「嫌だ、謝りたくない」みたいなのも出ちゃってもいいと思うんですけど。
……別に「関係が」うまくいなくてもスタッフは逃げていかないの。そこのぶ
つかり稽古じゃないけど、うれしい感情も嫌だっていう感情も、お互いにシェア
できると素敵だなとは思っていますよね。

専任スタッフの皐月さんは、子どもたちに対する自分のスタンスは、お正月など
と一緒に遊んでくれる「親戚のおじさんが一番近いのかも」と語る。

支援者視線は全然ないっていうか、かなり弱いとは思ってます、自分でも。それは
おっきいのかなとは思いますが。何か無理だったらやんなくていいやって思いますし、
子どもが。何かを求めることもすごい嫌いかもです、子どもに。好きなことだけや
ってれば。好きなことだけでもよくないんですけどね。いま、自分がやりたいこと
をやって、で、納得いったら何かやってほしいことやってほしいなってぐらいで。
…… [X もひとつのコミュニティであり、X でやらなければならないことがあるた

め、] Xにいるってこと自体がハードルになる子とかが多いとは思うんで、そういう子が少しでも、まずそのハードルが下がればいいなとは思っていて。そこを、どうやればハードル下がるんだろうって考えて、今の子どもと接する時のスタイルになった気がします。

中高生を対象とした居場所 Y 同様、居場所 X でも、支援スタッフと利用者の子どもたちは、おとな - 子どもという縦の関係ではなく、横かナナメの関係を生きている。梶月さんが語ってくれたスタンスは、桔梗さんのいう「余白の時間」を子どもたちにできるだけ保障しようとするものだといえる。「別に〔関係が〕うまくいなくてもスタッフは逃げていかない」という居場所 X の恒常性は、家庭や学校で不安定な関係を生きてきた（いる）であろう子どもたちに、大きな安心感を与えるものだろう。居場所 Y の中高生同様、居場所 X の小学生も、一緒に遊んだり、時には一緒にケンカをするような相手である支援スタッフとの横の关系到支えられながら、自分の気持ちを最大限尊重してもらえる「余白の時間」の中で癒やされ、少しずつ、やるべきことへと目を向けられるようになる、と考えられる。

2.2.4 自拠点が子どもたちに提供している価値

桔梗さんの言葉を借りれば、「時には横」で「時には縦」にもなる「ナナメの関係で関わるおとな」は、子どもたちが育つ「日常」を作り続けながら、日常に活かせる力を育もうとしている。

家庭や子どもの「根本的な課題」の解決は、行政などの専門家と連携してそちらに委ねつつ、「私たちは私たちで、お子さんが伸び伸びと生活できるように、ちょっとおとなが圧をかけないみたいなのを結構そこは意識」しながら「その子が育つ日常を私たちは作り続けるっていうことは意識はしてた」、と桔梗さんは語る。

居場所 X の立ち上げ当初は、子どもたちが自分で自分の居場所を見つけたり、作り出したりすることが目指されており、「自分も相手も大事にする」というポリシーはそこから生まれたという。そのためにもどうすればいいのかと考えていくと、「生活するのに最低限必要なスキルだったりとか、人とのやりとりの中で守らなきゃいけないというか、気持ちよく過ごすためのルールだったり、お約束みたいなのは、一緒に X で考えながら、子どもたちとやっていきたい」という方針に行きついたそうである。

「X の子たちで共通しているのは、交渉する力みたいなのはすごく上がります」、

と桔梗さんは語る。時間も空間も限られている「その中で自分も相手も気持ちよく過ごすために、どういうふうに時間を区切ったらいいかとか、どういう場の分け方をしたらいいかとか、『私が今この遊びやりたいけど、じゃあ15分後、あなたのやりたい遊びにしようね』みたいな、遊びを通してだったりとか、生活を通して他者と調整していく能力は、みんな格段に上がってはいきます」。

こうした日常に活かせる力を、皐月さんは、「当たり前提供」と表現していた。「当たり前ってというのは、何かしたらこういう反応されるみたいな。『これやる時は、損するんじゃない?』とか、『得するんじゃない?』とか、たぶんみんな当たり前のように考えることとかを、子どもとかが知れるっていうのが一番の価値なのかなっていう気はします」。

日常に活かせる力は、桔梗さんの言葉を借りれば、「子どもが自分を受け止めてもらえるとか、否定されない」環境の中で育まれる。居場所Xに通う子どもたちの中には、「死ね」という言葉を日常的に使う子どももいる。そうした言葉遣いを単に否定するのではなく、「死ねの裏にめちゃくちゃいろんな思いが渦巻いてるので、それを取り出して、じゃあ、こういうふうに言ってみようみたいな、柔らかくして外にパスするっていうのは、Xが提供できる価値の一つかなと思ってます」、と桔梗さんは語る。

ここまで、日常に活かせる力として、交渉する力、当たりの感覚、ネガティブな言葉の言い換えについて触れてきた。さらに居場所Xでは、皐月さんも語っていたように、子どもたちが「嫌って言ったりとか、今はやりたくないんだって言っても、それを否定されない」ことを大切にしているという。桔梗さんは次のようにいう。「『何でやりたくないの?』とか、もちろん聞くんですけど、別にそれで無理に参加させるとかはないので、やりたくなったら入っておいでとか、戻ってきやすい関係はつくるんですけど、学校でもないし、無理に遊びに参加させなくても、彼らの時間で彼らのやりたいことをやるっていうのが一番なのかな、と」。自分を受け止めてもらえる否定されない環境の中で、子どもたちは、自分も相手も大事にするための力を身につけていく。

2.3 学習支援拠点

本節では、「日々の支援の中で大切にしていること」と「自拠点が發揮している価値」の2項目について、それぞれ拠点長をしていた虎杖さんと芝桜さんの語りからみていく。

2.3.1 日々の支援の中で大切にしていること

虎杖さんは、大切にしていることを3つ挙げてくれた。本人が今どうしたいかを尊重すること、ナナメの関係の存在であること、子どもに共感できていると思わないこと、の3つである。

1つは本人が今どうしたいかみたいなものを、何か一番大事にするし、尊重する……周りがこの子こうしたいほうがいいよと思っても、本人がそれを望んでない場合って結構あるかなと思ってて、……本人がそれをしてほしくないという権利は前提として大事にされるべき……2つ目で言うと、……先生とか指導者ではないし、親でもないし、友達でもないし、ナナメの関係ってよく言われるんですけど、そういう人として存在するみたいなことは、大きい。……3つ目は本人が持っている傷つきとか苦しさみたいなところについて、分かるなどか、想像できたなって思わないようにしてるのがすごいあって

共感できていると思わない代わりに、虎杖さんは、「あなたのこと大事に思ってるおとなはちゃんといるよ」というメッセージを子どもたちに伝えることを「すごいしてきた」という。「言葉にして言うのもそうだし。ただ分かるよって言わなくても、話を黙って聞くとか、一緒にふんふんって、ただ一緒に流れを過ごすみたいなところでも、存在として何かそれが伝わってたらいい」と彼女は語る。虎杖さんは現在、学習支援拠点Zから離れているが、当時の自分の役割について次のように語ってくれた。「何かあった時とか、困った時とか、しんどい時は、絶対スルーしないで一回受け止めてくれるなどか。日々のいろんな感情とか体験と一緒に共有するみたいなのはすごいあったなと思って、たくさん笑うし、爆笑するし、悲しい時には一緒に悲しむしってことはすごいしてたなと思います」。

虎杖さん同様、芝桜さんも、「本人がどうしたいかみたいなところをゆっくり一緒に考える時間」をととても大切にしているという。そのために彼女は、支援者として「暫定解を積み重ねる」ことを意識している。

常に自分が出した思うこととかに対して、それってほんとにそうなのかとか、子どもにとってほんとにいいのかっていう。私的には暫定解を積み重ねるみたいなふうに考えてるんですけど、一回決めたりとか、この価値観が全てだとか、そういうことではなくて、常に振り返るといふか、常に問いを持ち続けるといふか、そういう

ところはすごい大事にしたいって。

「暫定解を積み重ねる」という芝桜さんのスタンスは、虎杖さんが大切にしている3つのことに重なる。支援者としての自分が出した解答が正しいと思ってしまうと、子ども本人がいまどうしたいのかが見えなくなってしまうったり、子どもの意思と自分の解答とがズレているときに、支援や教育の名のもとに、自分の解答の方に子どもを引っ張ってしまうかもしれない。支援者としての自分が出した解答が正しいと思ってしまうと、子どもと横やナナメの関係を生きることが難しくなるだろう。支援者としての自分が出した解答が正しいと思ってしまうと、子どものことをすべてわかった気になって、虎杖さんの言葉を借りれば、子どもに共感しきれたと考えて、子どもを傷つけてしまうことさえあるかもしれない。

自分の判断を暫定解だと思い続けることは、子どもの変化に常に敏感であり続けると同時に、常に自省し続けることであるため、支援者にとっては容易なことではない。しかし、支援者のこうしたスタンスに支えられることで、学習支援拠点Zの子どもたちは、居場所Xや居場所Yの子どもたちと同様、安心感の中で癒やされ、自分のやりたいことを自分で見つけ出す力を育んでいくのだろう。

2.3.2 自拠点が提供している価値

学習支援拠点Zが子どもたちに対して発揮している価値について、虎杖さんは「個別の強みを生かした対応」、芝桜さんは複数の意味での「安心感」を挙げる。

学習支援拠点は、「おとなと1対1で個別でじっくり何かできる」という強みを備えた「きっかけみたいところになる場所」だと虎杖さんは語る。まず、居場所は欲しいが同世代のコミュニティになじみにくい子どもの持つ、「じっくり何か、誰か少人数としたい」というニーズに応えつつ、居場所拠点につながるきっかけを作ることができる。芝桜さんも、学習支援拠点だけが「唯一ネガティブな気持ちにならない場所」になっている高校生のエピソードを挙げながら、「子どもも全ての場所と同じ顔を見せてるわけではなくて、ここではこういう顔を見せたいとか、そういう場がいっぱいあることで、他でのストレスをここで吐き出したりとか、そういうことの一助になっているのかもしれない」と語る。

2-1で取り上げた中高生のための居場所Yにおいて、拠点長の山吹さんは、子ども同士の横の繋がりを意図的に育もうとしていた。しかし、困難を抱えている子どもたちの中には、同世代のコミュニティになじみにくい子どももいる。虎杖さんの

いうように、支援スタッフと一対一の関係を結ぶ学習支援拠点は、そうした子どもたちの受け皿になっている。

さらに、虎杖さんによれば、少なくとも学習支援拠点Zは、子どもが「やりたいなってちょっとでも感じてることがあったら、それを一緒にかたちにしていける可能性がある場」だという。

学習支援の……枠組みの中でできることってすごい限られてるじゃないですか。でも何か本人がやりたいなと思ったこととかが出てきたら、それをどうにかして実現させようとするおとなはたくさんいるかなと思っていて、そこは枠組みちょっと超えたかたちで実現できるとか、そういった場につながれるとか、そういうきっかけみたいなどころになる場所かなというふうに、今すごい思っている

子どものやりたいことをどうにかして実現させようとするおとなはたくさんいる、という虎杖さんの語りに対応するように、芝桜さんも学習支援拠点そのものに対して子どもたちが抱いているだろう安心感について語っている。学習支援拠点Z「自体に対して〔子どもたちが〕安心感を感じているのは、同じ人がずっといるということよりも、それもあるんですけど、今まで子どもたちが関わってきた先生たちが、みんないい人だったから新しい人もきっといい人だろうみたいな、そのみんながつかないできたバトンのようなものが大きいかなって」。

芝桜さんのこの語りは、3-1-1で考察する支援の属人性の問題とリンクしている。芝桜さんが言うように、「今まで子どもたちが関わってきた先生たちが、みんないい人だったから新しい人もきっといい人だろう」と子どもたちが思っているならば、学習支援拠点における支援は属人的ではない、とすることができるだろう。それが可能になるのは、支援スタッフが変わっても、虎杖さんや芝桜さんといった拠点長が変わらないことにより、場の文化が継承されていくからではないだろうか。そしてその文化とは、たとえば、子どもがやりたいと思ったことを「どうにかして実現させようとする」というスタンスだと言える。そうしたスタンスを採ることのできる支援スタッフは、子どもたちから見れば、「いい人」なのである。

2.4 地域を担当するSWer

本章の最後に、海棠さんの語りに基づき、SWerの役割、SWerが大切にしていることという2項目についてみていく。

2.4.1 SWer の役割

筆者らがインタビューを実施したのは、海棠さんが LFA に入職してちょうど 1 年が経った頃だった。入職した当初は、地域の拠点間で「なかなか情報共有がされてなくて、全然連携ができてなかったような感じだった」が、SWer は「拠点横断で動けるので」、「情報共有、拠点管理しながら」拠点間の連携を進めていった。

上述したように、子どもや家庭が複数の拠点を利用しているケースも多いため、連携を進める中で、「自然と拠点長たちが、そのご家庭のケース会議として家のことをいろんな拠点で横断して話し合うような感じになった」という。SWer は地域全体を担当しているため、家庭に対して「Z でも連絡できるし、Y でも連絡できるし、面談とかも、X でもできるので、僕も事あるごとに同席したりとか、Z でその子が来てなかったら僕から電話したりとかして、ちょっとずつ今、[家庭との] 距離を詰めて」いる段階だという。SWer が保護者と繋がることの重要性について、海棠さんは次のように語る。

子ども支援だと思ってるんですけど、やっぱり家庭に帰ったら保護者が圧倒的に子どもを見る時間が長いので、子どもの周辺環境へのアプローチとして、やっぱり保護者へのアプローチは必須だなとかいうか、もうなくてはならないなと思ってる。やっぱり家庭だけで何とかするとかって難しいと思うので、僕は。何とか相談してほしいし、みんなで子育てできたらいいじゃんみたいなところで、ほんとはやりたいなと思ってる

支援が必要な保護者や、警戒心の強い保護者も多いため、自身が運営しているフードパントリーで配布している食品を「ちょっともらってあげませんかとかって [お願いする感じで] 言うと、いいですよとかって [保護者が] 言ってくれたりとか、いろいろ工夫しながら」保護者との繋がりを模索しているという。

他方、各拠点の利用者に対しては、1 年を過ごしてみて「役割を見失って」いる状況だと海棠さんは語った。

僕って、やっぱりちょっと外にいるじゃないですか。拠点の外にいるから、なんか、すごくいいことだと思ってるんですけど、僕の役割が分かんなくなるっての、すごくいいことだと思ってるんですけど、僕いなくてもあんまりいいかなって、最

近思ってて。……最近、何でも相談していい人としてやってんだけど、子どもたちはやっぱり拠点の人に相談するなと思ってて。それってすごくいいことだなと思ってて。

海棠さんは、「何でも相談していい人」という立場で、各拠点を利用する子どもたちと関わっている。しかし実際には、これまで信頼関係を築いている拠点のスタッフに子どもたちは相談するため、彼は自分の役割を見失っている。その代わりに、「結構、ほんと間接支援みたいなニュアンスでスタッフの話聞いたり、〔スタッフが〕方針立てる時になんとか居て何かしゃべるみたいなのがやっぱり」意味があるのではないかと考えているそうである。「ちょっと後方に、後方支援みたいな…ニュアンスが僕は強くなっていくのかなってすごく思ってた」、と海棠さんは語る。彼のこの語りは、拠点長たちとの座談会でのものだったが、この語りを受けて居場所 X の桔梗さんが次のように語っていたのが印象的だった。「カイカイ〔=海棠さんの愛称〕に相談するときって、ちょっと自信ないなみたいな、ちょい客観的な意見欲しいなっていうときとかは、特に私はカイカイ頼っちゃう」。海棠さんが自覚しているとおり、SWer は、地域や家庭との連携や子どものケアだけでなく、支援者に対する後方支援の役割も担っている。

2.4.2 SWer が大切にしていること

1 年間の中で印象に残っている子どもについて語ってもらった中で、子どもたちと家族に「しっかり困ってもらって」、支援者が「苦労を奪わない」という、海棠さんが大切にしていることが浮き彫りになった。

居場所 Y の中でリストカットをするなど、「しっかりと問題を起こして」くる子どもに対して、「Y の中では、〔スタッフ〕みんなでその子の対応についてどうするかを話す時間を取って、めちゃめちゃミーティングしたなっていうのがある」、と海棠さんは語る。「結局、何か対応方針とか立てても、そのとおりにはいかないんですけど、ああだこうだみんなでしゃべっていくうちに、スタッフも、もう何でも大丈夫みたいな感じで結構たくましくなってきた、すごい僕たちも鍛えられたな……というケース」だったという。「拠点スタッフも僕たちも本人の味方であり続け」ながら、「お母さんとの話し合いの中でも、本人の気持ちを聞いたりとか、『どうしたい?』っていうのを〔本人に〕聞き続けて対応し続け」ることで、当該の子どもは次第に落ち着いていったそうである。このように本人の気持ちを聞き続けることを、海棠

さんは大切にしている。

表に出てきた行動だけを見て、注目しなければみたいな感じでやるんじゃないくて、きちんと、「何でそうなっちゃったんだろうね」っていう、「あなたはじゃあすごく傷ついてたんだね」っていうところをとか、別に傷ついてなくてもいいんですけど、単純におなかが空いてたんだねでも、眠かったんだねでもいいんですけど、そこをちゃんと理解してあげるといふか、分かってあげるっていうのはすごく大事な気がしてて。そうすることを続けていくことで、そういう派手な行動をしなくても、「おなかが空いた」って言えたりとか、「眠たい」って言えたりとか、「しんどいんだけど」って言えたりとかするようになる気がするんで、SOSとしてキャッチした後、派手な行動に目を向けるんじゃないくて、「どうしたの？」っていうのを聞けるようになれたらいいなとは思ってますかね。

子どもの問題行動を、その子どもからのSOSとして受け止めたうえで、問題行動それ自体よりも、その背後にある子どもの気持ちに目を向ける。こうしたスタンスを採る海棠さんは、支援される側の人を中心に据えた関わりを徹底している。というのも、支援する側が「これが必要だよねって言って支援をするんじゃないくて、やっぱ自分たちでちゃんと困って、その困りを元にちゃんと相談をしてもらって支援が入るっていうかたちじゃないと、なかなか続かないな」といふか、おせっかいな感じで終わってしまうみたいな、結局つながりきれないな」と感じているからである。だからこそ彼は、子どもが問題行動を表出したり、保護者との間に軋轢が生じたりすることをネガティブに捉えない。そうではなく、むしろ「ようやく困るタイミングが来たな」といふか、ポイントが来たなと思ってるので、あんまり助け過ぎず、しっかり困ってもらって、そこから一緒にどうしたらいいか考えられたらいいなっていうふうに」ポジティブに捉えている。海棠さんはこうしたスタンスを、当事者から「苦労を奪わない」という印象的な言葉で語っている。

苦労を奪わないみたいなことは大事にしていて、なんかこっちが全部やっちゃって、こっちもやっぱ関わり期限があるんで、なんか僕たちが離れちゃったら全然自分で立って歩けないみたいな、その時にやっとなら困りと向き合わなきゃいけないとすごく大変だなと思って。[それ]よりは、僕たちが先回りして困りを奪うんじゃないくて、ちゃんと本人が困ってるところに一緒に立ち会いたいなっていうか、支援したいな、

関わりたいなみたいな気持ちもあって。しっかり苦勞を返すというか、奪わないみたいなのは、結構〔支援する側は支援される側の〕苦勞〔を〕奪いがちなので。奪いがちっていうか、なんかやっぱり支援者って先回りして考えたくなるし、やってあげたくなっちゃうなと思ってて、僕も結構そういうタイプなので、そこはなんか、ちゃんとしなきゃなと思って結構自分で言ってるのもあります。結果的に、やっぱり自分たちがいないと回らないっていうか、生きていけないってことは良くないなっていうところがすごくあって。

2-1-2でも触れたように、居場所Yの拠点長山吹さんが大切にしている「何もしない」ことと、居場所Xの拠点長桔梗さんが大切にしている「余白の時間」と、SWerの海棠さんが大切にしている「苦勞を奪わない」ことには共通点がある。それは、子どもを中心に据えていることである。「余白の時間」は、子どもが自分のやりたいことをやったり、あるいは、やりたいことが育まれるように癒やされるための時間である。居場所Yにも「余白の時間」は存在している。その時間の中で支援者は、「先回りして考えた」り、子どもの代わりに「やってあげた」りするのではなく、意識的に「何もしない」。何もしない中には、「苦勞を奪わない」ことや、一緒にただらしたり遊んだりすることも含まれる。こうした「余白の時間」は、上述したように、子どもが自分の生活や人生を受け止めきれなくなったときに、子どもたちのつらさが「こぼれた時に受け止めておける堀」（山吹さん）を作る役割を果たしている。

以上、本章では、各拠点の支援者へのインタビューに基づき、子どもたちの居場所を日々運営している彼らの活動と描いた。次章では、各拠点で支援を継続する難しさと可能性について、再度インタビューを手がかりにしながら考察する。

第3章 支援を継続するにあたっての難しさと可能性

中高生を対象とする居場所の利用者と各拠点の支援者へのインタビューからは、地域の各拠点で支援を継続・展開する際に検討すべき点も見えてきた。第1節では各拠点運営の観点から、第2節では地域協働型子ども包括支援の観点から考察する。

3.1 各拠点運営の観点

3.1.1 属人性の問題

・居場所が生成・展開していく感覚

前章でインタビューに基づき見てきたように、各拠点のスタッフたちは、それぞれ明確なポリシーをもって拠点運営に携わっている。学習支援拠点であれ、居場所拠点であれ、そこを運営するスタッフの存在感が拠点の雰囲気や支援の方向性を左右することは否めない。こうした属人性の問題について、支援者の言葉を手がかりに考えてみたい。

結論から述べれば、現場の感覚としては、拠点運営に際して、属人性は問題とされていないようだ。例えば、小学生を対象とする居場所Xでも、中高生を対象とする居場所Yでも、現在拠点長である桔梗さんと山吹さんをのぞくすべてのスタッフが、立ち上げ当初から入れ替わっている。学習支援拠点では、大学生やインターンといった支援スタッフは数ヶ月で入れ替わる。したがって、いずれの拠点でも、ケース会議やスタッフミーティングを頻繁に実施することで、支援観のすり合わせを行っている。2-4-1で触れたように、SWerの海棠さんの入職後は、拠点間の連携（情報だけでなく支援観の共有）も円滑になっている。

中高生を対象とする居場所Yの山吹さんは、居場所が生成・展開していく感覚について次のように語っている。

場だけあれば取りあえずいろんな人が来て、そこから〔居場所が〕つくり出されていくものかなっていうふうに思ってますし、人が変わればそのかたちも変わっていくだろうっていうふうに思ってるので。生き物みたいな感じですかね。絶えず変化してるじゃないですけど。「これが嫌だ」は揃ってる気はするので、もしかしたらそこはぶれないかもしれないんですけど。でもどうかな、その軸もいろいろ変化はしてるかもしれないですね、もしかしたら。なんですけど、そんな感じでいろんな人の影響でちょっとずつかたちを変えていってるものかなと思ってます。

居場所は、そこに属する人たちに影響を受けながら生き物のように絶えず変化している。そう言いながら他方で、山吹さんは、「いろんな子来るんですけど、最終的にYっぽくなる感じはあって」とも語る。彼女が「Yイズム」と呼ぶ拠点の雰囲気は、「誰が作っているのか……ちょっとよくわからない」が、「子どもだけであの場においても、なんか最終的にたぶんああいう感じになる気は」するという。こうした「『Yイズム』みたいなのが、やっぱみんなの中にたぶんあって、一人ひとりがそれをくみ取っているのかもしれないし、作っているのかもしれない」、と彼女は感じている。山吹さんの語りからみえてくるのは、「Yイズム」が決して属人的なものではなく、そのとき拠点に属している人たちに影響を受けながら影響を与えてもいるような、流動的なものだという事だ。老舗のうなぎ屋が秘伝のタレを継ぎ足しながら引き継いでいくように、拠点の場はそのままに、支援者も利用者も入れ替わり続ける中で、そのときの構成メンバーにとってよりよい居場所のかたちが、柔軟に模索され実現されていくのだろう⁹。

・「支援者が利用者に居場所を提供している」という考え方への違和感

属人的でない柔軟で流動的な居場所形成を支えているのが、各支援者から語られた「支援者が利用者に居場所を提供している」という考え方への違和感だといえる。

例えば、小学生を対象とする居場所Xの桔梗さんは、「居場所という場をおとなが提供しているっていうところには違和感というか、居場所を提供しているわけではなくて、場をこっちは作っていて、[そこを]居場所にはしているのは彼ら [=子どもたち] なので」と語る。彼女にとって、居場所Xはあくまでも、「子どもたちが居場所を作り出すとか、今後彼らが巣立って、居場所を自分で見つけていくための力をつける場所」なのである。

同様に、山吹さんも、「職員が[居場所を]用意して[そこに子どもたちが]入るんじゃないくて、ちゃんとその場にいる人たち一人ひとりで作るものっていう感じなのかなと思ってます」と語る。彼女は、「自然発生的になんとか集まりができて、そこがなんか誰かにとっての居場所になっていくみたいなのが、すごい自然な流れ」

⁹ 2-3-2で引用した「同じ人がずっといるっていうことよりも、それもあるんですけど、今まで子どもたちが関わってきた先生たちが、みんないい人だったから新しい人もきっといい人だろうみたいな、そのみんなが繋いできたバトンのようなもののほうが大きい」という芝桜さんの言葉も、同様の考え方を示すものである。

だと考えている。LFAのような「団体が運営している居場所に来る子っていうのは、たぶん普段の生活の中でそれができなかった子たち」だからこそ、彼女は、「いろんな人が来たり来なかったり、入れ替わったり入れ替わんなかったり、移行する中で自然とそこにあるもの」として拠点を運営しようとしている。

3.1.2 居場所支援の成果をどのように捉えるか

支援者と利用者の語りから示唆されるのは、特に居場所支援の成果は短期間では明らかにならない、ということである。さらに言えば、いつの時点の何をもって成果とするのか、という問題もある。本項では、居場所拠点の支援者が携えている長期的な視野と、居場所のさらなる展開可能性について、居場所拠点の利用者と支援者の語りを手がかりにみていく。

・支援者が携えている長期的な視野

第2章で引用したとおり、支援者は、数年間といった長期的な視野で子どもたちの成長を見守っている。例えば、中高生を対象とした居場所ボランティアの紫苑さんは、拠点を、答えを出さずに待ってられる場所と表現していた。スタッフの芝桜さんは、拠点は「今日これをして明日子どもがこう変わるとかそういう場所じゃない」と考え、「2年後3年後」を視野に子どもと関わっている。居場所 Y の拠点長の山吹さんによって印象深い子どもとして語られた少年も、自分のついたウソをウソと断じられずに見守られるというプロセスの中で、支援者への信頼感を育んでいった。同じく、居場所 X の拠点長の桔梗さんが語った少年も、時計が読めない状況から、字のきれいさを誉められたことをきっかけに、国語の勉強に意欲的に取り組むまでに成長している。桔梗さんは明示的に語っていないが、彼の成長も数年間にわたるものだろう。

さらに SWeR の海棠さんは、LFA に入職してからの1年間を「種をまいてる段階」と表現する。

今そこ〔＝保護者や地域の関係者と〕の関係性づくりを1年かけてやってきて、まだまだこれからと。常に関係性をつくっていかなくちゃいけないので。……ほんとに今、種をまいてる段階だと思ってるので。ほんとに、この辺の言語化は難しいですよ。ここに一番時間かかるんですけど、ここってほんとに評価ってあんまされない部分だと思うので。

海棠さんは、現在繋がっている子どもたちとこれから繋がることになる子どもたちへの支援を円滑にするために、地域の子どもに関係するすべてのひとびと（保護者、学校、行政、地域など）との関係づくりを1年間かけて行ってきたという。子ども支援における何らかの成果を、花が咲くことに喩えるならば、彼はまだ種をまいている、あるいは土壌を豊かにしている段階である。綺麗な花を咲かせるために必須のプロセスであり、「一番時間かかる」プロセスでもあるが、何らかの成果を上げているわけではないので評価されにくい。

評価されにくいのは、答えを出さずに待つという上述したスタンスや、山吹さんがくり返し語っていた、「～しない」「～し過ぎない」というスタンスも同様だろう。何もしない、先出ししない、出しゃばらない、自分の意思を乗せ過ぎないといった彼女のスタンスは、子ども自身の成長や変化を長期的な視野で見守るという彼女のポリシーに支えられている。上述した少年を典型例として、学校や家庭での生活で傷ついた子どもたちが癒され、自分自身と他者を信頼できるようになるためには、支援者によって見守られる時間が必要だ。しかし、山吹さんの語る「何もしない」ことも、小学生を対象とした居場所の拠点長の桔梗さんの語る「余白の時間」も、何らかの成果に繋がっていることが一見するとわかりにくい。

ここで、居場所支援における成果とは何か、という問いが浮き彫りになる。小学生を対象とした居場所で過ごす子どもたちが総合的な生活力を身につけることや、中高生を対象とした居場所で過ごす子どもたちが不登校から脱することは、それぞれの居場所が子どもたちに提供している重要な価値であり成果である。しかし同時に、これらのことは、子どもたちがおとなになっていく長いプロセスのなかの一通過点に過ぎないとも言える。事実、前項でふれたように、桔梗さんは、居場所Xを「子どもたちが居場所を作り出すとか、今後彼らが巣立って、居場所を自分で見つけていくための力をつける場所」だと捉えている。彼女のこの言葉は、子どもの成長を長期的に捉え、居場所での支援を超えた子どもの生活全体を視野に入れた言葉である。桔梗さんのスタンスに立てば、居場所における支援は、子どもたちが拠点と繋がっている間にわかりやすい成果がでない可能性もあるが、長期的な視野で見たときに子どもたちの成長や変化に影響を与えられていればよい、ということになる。本調査でインタビューをしたすべての支援者が、多かれ少なかれこうしたスタンスを採っている。そうした支援者に見守られながら、実際、子どもたちは癒され成長している。ここに居場所支援における評価の難しさがある。

・居場所拠点のさらなる展開可能性

利用者と支援者の語りを手がかりに、居場所拠点のさらなる展開可能性について考えたい。

第1章と第2章でみてきたように、A地域のすべての拠点が、想定される支援内容をできる限り拡大するかたちで運営されている。例えば、学習支援拠点の虎杖さんは、学習以外でも子どもがおとなと一対一で個別でじっくり何かに取り組めることを強みとして挙げていた。2つの居場所拠点では、子どもの思いや願いをできるだけ尊重する関わりが実践されていた。他方で、小学生を対象とした居場所スタッフの皐月さんは、拠点ではできないことについて、次のように語っている。

タブレットいじって1日過ごすとか、拠点で、それはいいことか悪いことかわからないですけど、もダメですし。ふと子どもたちが言い出して、じゃあ外で何々しようぜみたいなのも意外とないなって。何かイベントをやる時は、きっちり子どもの会議して企画書作ってみたい。そういうフットワークの軽さがあんまないとは思います。

自然発生的にできた居場所ではなく、あくまでも居場所「拠点」だからこそ、ある程度の規範が働かざるを得ない。同様に、中高生を対象とした居場所ボランティアの紫苑さんは、固定の登録メンバーが集う拠点よりも、「たぶん学年的には小学生から高校生とか、何ならOB、OGとかまでいる」「フードパントリーのときとかの方が……逆に場って感じがする」と語る。

〔統括しているSWerの海棠さんがフードパントリーを〕カオスって思えるのは、ある種やっぱりそこに管理しようとする力があるというか、目線、視点があるからで、僕はあんまりたぶんそれが好きじゃないから、むしろ自由でいいなと思うし。……やっぱり普段〔拠点に〕いる時には見えないような〔子どもたちの〕いろんな顔が出てくるので、それぞれの相互作用なんだろうし。来るメンバーも結構土曜日って違ってて、来なきゃいけない会じゃないんで。僕たちもボランティアって立場なので結構いろんな、それこそ学習支援とかに行ってるような子とか、XとかYも含め、いろいろなメンバーが集まる。で、毎回人が違う、何となく。だからこそみたいなのがあって、僕が思う場〔=居場所〕はたぶんそういう感じなんだよなっていう。

筆者たちがフードパントリーを見学した際も、幼児から、学習支援拠点の利用者の高校生とその友人といった幅広い子どもたちが拠点に集っていた。本来、子どもたちはフードパントリーの手伝いのために集まっているが、実際に手伝いをしていたのはそのうちのごく一部で、ほとんどの子どもたちはテレビゲームで対戦をしたり、近所の公園に遊びに行ったりと、楽しそうに過ごしていた。こうした状況について、海棠さんは「カオス」と、紫苑さんは「それぞれの相互作用」と表現しているのだろう。ここでも問題になるのが、場の規範をどう捉えるのかということである。

本節でここまで描いてきたように、A 地域の各拠点では、そのときの構成メンバーにとってのよりよい居場所のかたちが、柔軟に模索され実現されている。しかし上述したように、居場所拠点である以上、ある程度の規範が働かざるを得ない。利用者のハルさんは、ある拠点スタッフのいいところについて次のように語っている。「やっぱ、こういう居場所だから、ルールは大事なんだけど、他のスタッフと一貫してて、やっぱそのつど、そのつど、ルールを破るわけじゃなくて、ちょっと変えながら、何とか実現したりとかっていうのをしてて」。このように子どもの希望と規範のせめぎ合いをどう捉えるのかというところに、居場所拠点のさらなる展開可能性があるのではないだろうか。

本節の最後に、利用者からの要望を紹介したい。ハルさんは、「ほんとに素直にもう、自分の、いいところが詰まってる場所なので」要望はまったくないという。「私が求めている居場所とかっていうのが、今の現状で満足できている」からこそ、開室日はすべて通っているアキさんは、「欲を言うなら毎日のように通えるようにしていただければ、私はありがたい」と語る。平日に仕事をすることもあるナツさんは、「月イチでもいいから土曜日か日曜日やってほしい」、開室時間も 20 時より長くしてほしいと望んでいる。利用者のこうした声は、居場所拠点をさらに展開する際の重要な手がかりになるだろう。

3.2 地域協働型子ども包括支援の観点

3.2.1 拠点間連携

第 1 章において見てきたように、A 地域内には LFA が運営する多様な支援拠点・サービスが存在する。それゆえに、家庭によっては複数の子どもがそれぞれ別々の支援拠点・サービスを利用するというケースも見受けられる。そうした状況を踏まえ、A 地域の各拠点では子どもや家庭に関する情報を共有し、子どもと家庭を包括

的に支援しているという。例えば居場所 X、居場所 Y、学習支援拠点 Z にそれぞれ子どもが通っている多子世帯の支援については、それぞれの拠点、および SWer の海棠さんが少しずつ異なる役割を果たしている様子がうかがえる。居場所 X の拠点長である桔梗さんは、「唯一、居場所 X だけがちょっとご家庭〔当該世帯〕と繋がっていて、……学習支援拠点とか、Y とか、複数拠点で繋がれているというのは、今結構そのご家庭がピンチを迎えているんですけど、LFA 内の職員で色々な角度から、そのご家庭をみんなでケースワークできている」と語る。また、居場所 Y の拠点長である山吹さんも、座談会において「最近はお子とか家庭とかまたがっている時は、そこ〔拠点〕の間で情報共有ができることがすごく増えてきたなというふうに思います。私はそっちの方が圧倒的にやりやすいなというふうに感じているので、そこは今後もやっていけたらいいんじゃないかなと思います」と語っている。

そうした拠点間連携を可能にしているものの 1 つは、SWer の海棠さんの存在である。A 地域の拠点に横断的に関わり、主に家庭や学校など子どもの生活環境の調整を行う SWer として、海棠さんは当該世帯の支援においても大きな役割を果たしている。個別インタビューの中で、海棠さんは当該世帯への支援の変遷を語ってくれた。

去年僕が入職した段階では、なかなかお母さん、ご家庭自体もすごく心配だけど、支援が入っていないという感じでした。LFA の拠点の間でもなかなか情報共有がされていなくて、全然連携ができていなかった感じだったんですけど、そこからスタートして、拠点横断で動けるので、僕が情報共有、拠点管理しながら。ただ、自然と拠点長たちが、そのご家庭のケース会議をして、家のことを色々な拠点で横断して話し合うような感じになりました。僕も……学習支援拠点でも連絡できるし、居場所 Y でも連絡できるし、面談とかも居場所 X でもできるので、僕も事あるごとに同席したりとか、学習支援拠点で子どもが来ていなかったら僕から電話したりして、ちょっとずつ今距離を詰めています。この冬だと……フードパントリーとかもずっとやってるんですけど、「食材が余ったので何か届けに行きませんか」みたいななかたちでご飯届けたりとか、そんな感じで結構関係性ができてきたなと。

地域協働型子ども包括支援において各拠点が有機的に連携することで、1 つの家庭に対して様々な角度から情報をヒアリングし、その時のニーズに沿った最適な支援を行うことができる。そうした有機的な連携を可能にしているのは、2-4 で見

たような拠点間を横断して活動する海棠さんの存在に加え、3-1-1で見たような拠点間でのケース会議等の協働体制である。

3.2.2 地域との連携

地域協働型子ども包括支援においては、LFA内の拠点間連携だけでなく、行政や学校、NPOや地域住民等様々な社会資源との連携が目指されている。実際、A地域の支援拠点はそれぞれ行政や学校等の公的なセクターとの間で、情報共有やケース会議への参加など様々な連携を行っている。他方で、公的なセクターとのさらなる連携、および私的なセクター（A地域内の他のNPOや地域住民等）との連携の構築は、今後の課題である。

公的なセクターとのさらなる連携においては、個人情報の問題が挙げられる。座談会の中で桔梗さんは、「困り感が強いご家庭があって、そのご家庭の家庭状況も踏まえた上でアセスメントしていくとなると、やっぱり拠点の中だけじゃどうにもできないと思います。それを学校、行政、地域の別の支援機関などと連携していきたいけど、個人情報という壁が今ぶち当たっている」と語る。『『どういう勉強法がいいですかね』とかそういう相談』であればできていた学校との連携においても、例えば虐待等のいっそう困難度が高い子どもや家庭の情報については、連携に一定のハードルがあるようだ。

私的なセクターとの連携の構築については、インタビューの多くが「まだまだこれから」という課題感を共有している様子であった。公的なセクターとの繋がりだけではA地域の子どもや家庭を支えるのに限界があるため、困った時の身近な頼り先が複数あり、地域全体で子育てができるような状態を作っていく必要がある、と海棠さんは語る。

やっぱりもうちょっと地域と〔一緒に〕やっていかないと、うち〔=LFA〕だけじゃ難しいんじゃないかみたいなのが今もう既に出てきています。地域全体でご家庭を支えるみたいなのところが、もうちょっと先かなと思っているんですけど。……今は結構行政、制度、サービスが〔連携先として〕多いなと思っていて、本来繋がるべきというか、繋がる権利を持っているけれど、繋がれていない、知らないみたいな方をまず繋げている感じです。そこはまずやっていきたいし、そこも大事だとは思っています。でももうちょっと地域住民とか、何か身近に頼れる人がいるとか、行政とかって相談しにくいので、結構近場でも民間のNPOとかもいっぱいあったりとか、

フードパントリーとか子ども食堂もこの地域には結構あるので、そこをもっと知って行って、何か困った時にそこに駆け込めるとか。それこそちょっと困ったから、ご飯一緒に食べられるとか、地域の資源をもっと知っていたりとか、そういうフォーマル、インフォーマル関係なく、もうちょっと地域全体で子育てができるというか。

私的なセクターとも繋がれていることは、子どもたちが「子ども」という枠を卒業した後にA地域で生きていくための関係性の土壌にもなる。

例えば、居場所Xは子ども食堂機能も備えているため、皿洗いを手伝ってくれるおじいちゃん、食事を作ってくれるおばあちゃんや母親、野菜ができたタイミングで寄贈してくれるおじいちゃんなど、それぞれのやり方で子どもの支援に携わってくれる地域の方々との交流がある。さらに拠点長の桔梗さんによれば、過去には、食事ボランティアとして関わっていた地域の母親からの情報提供により、一緒に児童相談所に連絡したこともあったという。こうした経験をふまえ、桔梗さんは、地域で困っている家庭や子どもの情報が集約される場所に居場所Xがなれば良い、と考えている。「地域の中で、どこにもキャッチされてない、でも困り感のあるお子さんみたいな情報って、お隣さんだったりとか、よく公園にちっちゃい子、連れてきてるママ、別のママが見て、あの子、いつもいるなみたいな。じゃあ、Xにちょっと相談してみようかなみたいな、そういうのができるといいなとも思います」。拠点が地域と持ちつ持たれつのできる良好な関係を築くことは、拠点を利用する子どもだけでなく、地域で暮らすすべての子どもたちにとって意味がある。

中高生の居場所である居場所Yでも地域との繋がりを大切だと考えており、居場所Yを卒業した後も子どもたちが相談できる関係性を居場所Yの外に作っておいた方がいい、と山吹さんは語る。

地域のシニアNPOの方に麻雀を教えに来てもらおうとか……そういったかたちで少しずつ繋がりは作っているんですけど、すごく入り込んでいるかと言われたら、たぶんそうではないというふうに思います。……どうしていったらいいのか、正直私もよく分からないっていう感じではあるんですけど。でも、子どもの卒業みたいなものを考えた時に、Yに助けられていたという感覚が強い子どもに関しては、卒業したら頼る場所がないみたいな感じになっちゃうと思います。そこを地域に渡していくみたいな意味で、Yが仲のいい地域の人が何人かいて、困ったらそっちにも

相談できるよっていう状態を作っておいた方がいいんだろうなと思います。でも、それは相談される地域の人の側にもニーズがないとたぶん無理かなというふうに思うので、それを見つけるのも大変だし、いなかったら作るしかないけど、作るのも大変だなとは正直思っているという感じですかね。

LFA の支援拠点を足がかりにしながらも、困った時に頼ることのできる関係性を LFA 外の地域資源とも取り結べることは、子どもたちの「いま」の生だけでなく、LFA の支援拠点を卒業したあとの「これから」の生を支えることに繋がるだろう。

また、A 地域全体へと目を移すと、インタビューイーが「小 4 小 6 問題」と呼ぶ問題が浮かび上がってくる。居場所 X が小学 1 年生～3 年生を対象としているのに対し、居場所 Y は中高生を対象としており、A 地域内には（LFA 以外が運営する拠点以外も含めて）小学 4 年生～6 年生の居場所が未整備な状況である。その穴をどのように埋めていくかという点について、単に LFA が拠点を新設すれば解決する話ではない、と桔梗さんは語る。

この地域の中で、4 年生から 6 年生の子どもたちが遊びに行ける場所は、児童館しかない。ないという状況がまず、地域としてどうなの、とは思います。そこに LFA が「4 年生から 6 年生の居場所を」ぽんって作るのは簡単なことだと思うんですけど、今後 LFA がなくなったらどうするんだろうとなるので。作るにしても、地域にどうやって返していくのか、終わり方どうするのか、みたいなところは見据えてやるべきだと思います。

地域協働型子ども包括支援における地域との連携は、短時間で簡単に構築できるものではない。小さな協働をくり返し、互いに信頼を積み重ねながら、じっくりと編んでいくほかはない。

終章 本調査のまとめ

本章では、以下の3点について総括することにより、本調査のまとめとする。第1節では、利用者が受け取っている価値と支援者が考える価値の比較を行う。第2節では、本調査から明らかになったことを項目別にまとめる。第3節では、居場所支援の今後の展望と調査の限界について述べる。

終-1 利用者が受け取っている価値・支援者が考える価値

利用者である子どもたちが居場所Yから受け取っている価値について、1-2では、「気を遣わずに過ごせて、話を聞いてもらえる」、「『やりたいこと』を表明し、応援してもらえる」「スタッフとの出会いと関わり」という3つの観点からまとめた。

インタビューに応じてくれたハルさん、ナツさん、アキさん全員が、居場所Yは気を遣わないで過ごせる場所だと感じている。それは、支援スタッフと子どもたち、子どもたち同士の中に「あまり上下関係が」なく「みんな友達」のようだ、という彼らの語りからうかがえる。彼らにとって居場所Yが気を遣わない居心地の良い場所であることは、ハルさんとアキさんがほぼ全ての開室日に通っており、日中仕事をすることの多いナツさんも「時間があれば」ふらっと立ち寄っていることから示される。特にハルさんは、Yは自分にとって「居場所」であり、「かけがえのない、**第2の家みたいな**」場であると語っている。

居場所Yで自分の話を聞いてもらえることについても、三者三様に語られていた。特に印象深かったのは、居場所Yに繋がるまでの自分の言葉は「いつも独り言だった」というアキさんの語りである。語りかけても受け取ってくれる人がいなければ、言葉は独り言になってしまう。しかし、居場所Yでは、支援スタッフや他の子どもたちの誰かが、アキさんの言葉を受け取り、自分の言葉を返してくれる。そうした関係の中で、アキさんは、自分の語りを「**聞いてくれる人がいるだけで、会話に昇格する**」喜びを実感することになる。

居場所Yでは、不登校など傷ついて自信を失っていた子どもたちが、自分のやりたいことを見つけられるまでに癒され、自分のやりたいことを表明し、その実現に向けて支援スタッフや他の子どもたちに応援してもらえる。たとえば、花火大会やバスケットボール大会を提案し、それらのイベントが成功したことが、ハルさんの

自信に繋がっている。作曲活動を行なっているアキさんは、支援スタッフと他の子どもたちに自作の曲や自身の上達を褒めてもらうことで、自信を深めている。

子どもたちにとって支援スタッフは、何でも話せる気のおけない友達であり、自分のやりたいことを応援してくれる相手であると同時に、おとなに対する肯定的なイメージを与えてくれる相手でもある。ハルさんのいうように、くすっと笑ってしまうような「ダメなおとな」の面を支援スタッフが見せてくれるからこそ、子どもたちも肩の力を抜いて、今のありのままの自分自身を受け入れられるようになるのだろう。さらに、3-1-2で触れたように、毎日のように通いたい、月に1回でもいいから週末も開室してほしいという要望が出ることから、子どもたちが居場所Yに大きな価値を見出していることがうかがえる。

ここからは、支援者が提供している／したいと考えている価値について見ていこう。本報告で取り上げた3拠点の支援スタッフはそれぞれ、以下のことを、利用者に提供している価値として語っていた。中高生を対象とする居場所Yでは、長期的な視野で見守られることによるこれまでの傷つきからの回復と、子ども同士の横の繋がり刺激による成長。小学生を対象とする居場所Xでは、時計が読めるようになることなど、生活をする上で必要最低限のスキルの獲得と、子どもたちの今がありようが否定されないこと。学習支援拠点Zでは、個別指導の強みを活かして子どもたちの願いを実現できることと、支援スタッフの異動が多い拠点だが、ここにいるおとなはみんないい人だ（自分のことを大切に考えてくれる）という安心感。

本節ではここまで、利用者が受け取っている価値と、支援者が提供している価値についてまとめてきた。居場所Yの3名という限られた利用者の語りという制約はあるにせよ、支援者が提供している／したいと考えている価値と子どもたちが受け取っている価値は重なっている、と言えそうである。

終-2 調査から明らかになったこと

本節では、本調査で改めて明らかになったことを3点述べる。その3点とは、生成・展開していく居場所、利用者の変化に必要な時間、地域協働型子ども包括支援の要となるSWerである。

終-2.1 生成・展開していく居場所

3-1で考察したように、どの拠点でもスタッフが数か月から数年で入れ替わっており、支援者の属人性は問題とされていない。確かに、各拠点は、居場所Yの山

吹さんが「Y イズム」と呼ぶような独特の雰囲気を用意している。しかし、この雰囲気も固定したものではなく、その時拠点に属している人たち（支援スタッフと利用者）に影響を与えながら影響を受けてもいるような、流動的なものである。各拠点では、そのときの構成メンバーにとってのよりよい居場所のかたちが、柔軟に模索され実現されている。その根底にあるのが、「支援者が利用者に居場所を提供している」という考え方への違和感である。居場所Xの桔梗さんも、居場所Yの山吹さんも、口をそろえて、居場所は支援者が提供するものではなく、子どもたち自身が作るものであり、子どもたちが拠点を居場所にするのだ、と述べていることが興味深い。

学習支援拠点Zの本来の目的は、日々の授業の補習や高校受験のための学習支援を個別で行うことにある。しかし、元拠点長の虎杖さんは、拠点Zを「おとなと1対1で個別でじっくり何かできる」という強みを備えた「きっかけみたいなどころになる場所」と捉え、学習支援以外の可能性を見出している。拠点Zには、居場所は欲しいが同世代のコミュニティになじみにくい子どもが繋がっている。「じっくり何か、誰か少人数としたい」という彼らのニーズに応えられるのが拠点Zの価値だ、と虎杖さんは語っていた。このように支援スタッフは、みずからの裁量の範囲内で、拠点の本来の目的を超えた支援の提供を模索している。各拠点は、その時通ってきている子どもたちのニーズに、その時所属している支援スタッフができる限り応えるというかたちで、そのつど生成・展開していく居場所なのである。

終-2.2 利用者の変化に必要な時間

第2章、第3章で見てきたように、日々の支援において大切にしていることとして、居場所Xの桔梗さんは「余白の時間」を、居場所Yの山吹さんは「何もしない」を典型とした「～しない／し過ぎない」スタンスを語った。

2-1で山吹さんが語った少年は、ウソをウソとして断じられない関係に安心感と信頼を見出し、自分からウソを認められるようになった。おとなと子ども、子ども同士の間にも上下関係がなく、答えを性急に出すことが求められない居場所Yで、子どもたちは、自分のやりたいこと／やるべきことを見出し、社会へと繋がりをおしていく。2-2で桔梗さんが語った少年は、居場所Xでの数年間の中で、マイナスをプラスにする働きかけ（時計が読めるようになる）だけでなく、プラスをさらにプラスにする働きかけ（上手な字がさらに上手になる）のおかげで、自信をつけて学習に意欲が持てるようになった。「余白の時間」にありのままの自分を受け止め

てもらえるという経験を経て、子どもたちは、「自分も相手も大切に」できるようになっていく。学習支援拠点 Z では、自分のやりたいことをできる限り実現しようと努力してくれる支援スタッフとの一対一の関係の中で、子どもたちは自分に自信をつけ、同世代のコミュニティへと繋がるきっかけを得ていた。

本文中で何度も述べてきているように、利用者である子どもたちが癒やされ、成長するためには、数年単位での時間が必要になる。また、3-1 で触れたように、対象が小学校低学年であれ、中高生であれ、居場所拠点に繋がっている時間は、彼らがおとなになっていく長いプロセスの中の一通過点に過ぎない。支援者たちは、子どもたちが拠点を卒業した後の未来を見据えて、現在の彼らと関わっている。支援には時間が必要であること、支援は「いま」の「拠点」だけで完結するものではないことは、強調してもし過ぎることはないだろう。

終-2.3 地域協働型子ども包括支援の要としての SWer

2-4 と 3-2 で見てきたように、SWer の海棠さんは、地域協働型子ども包括支援の要となる存在である。A 地域に住む子どもの中には、かつて居場所 X を、現在は居場所 Y と学習支援拠点 Z を、というように、複数の拠点やサービスにまたがって利用するケースがある。多子家庭の場合には、年齢やニーズに応じて、きょうだいがそれぞれ A 地域内の複数の拠点を利用することがある。SWer の海棠さんは、A 地域の拠点に横断的に関わり、拠点間の情報共有や、支援におけるそれぞれの役割分担がスムーズになされるように心を配っている。「ちょっと自信ないなみたいな、ちょい客観的な意見欲しいなっていうときとかは、特に私はカイカイ頼っちゃう」、と桔梗さんが語っていたように、海棠さんは、支援スタッフのサポートの役割も果たしている。

第 1 章で触れたように、地域協働型子ども包括支援が可能になるためには、LFA 内の拠点間連携に加えて、地域の子どもに関係するすべての人々（保護者、学校、行政、地域など）との関係づくりが重要になる。調査当時、LFA に入職して 2 年目に入ったばかりだった海棠さんは、現在繋がっている子どもたちとこれから繋がることになる子どもたちへの支援を円滑にするために、地域の関係者／機関との関係づくりを 1 年間かけて行ってきたところだった。彼はこの関係づくりを、「種をまいてる段階」と表現していた¹⁰。A 地域の各拠点は、学習支援拠点 Z を除いて運用開始

¹⁰ 海棠さんがまいた種がどのように芽吹き、どんな花を咲かせるのかを追うことは、本調査の今後の課題としたい。

から4年しか経っていない。そのため、3-2-2で考察したように、公的なセクターとのさらなる連携、および私的なセクター(A地域内の他のNPOや地域住民等)との連携の構築を、今後の課題と捉えている支援スタッフが多かった。こうした地域協働型子ども包括支援のさらなる展開の基盤となるのが、海棠さんが行っている関係づくりだろう。

上述したように、各拠点での居場所支援は、子どもたちがおとなになっていく長いプロセスの一通過点でしかない。だからこそ支援スタッフは、「いま」だけではなく、LFAの支援を離れた「未来」を視野に入れながら、子どもたちと日々関わっている。地域協働型子ども包括支援も同様に、子どもたちの「いま」を支えるだけではなく、おとなになってもこの地域で暮らし続けるかもしれない彼らが、LFAの支援を離れた後も、地域内の様々な人や機関と繋がって生きていくことの支援をも視野に入れた仕組みだと言える。

終-3 居場所支援の今後の課題と調査の限界

最後に、A地域における居場所支援の今後の課題と調査の限界について述べて、本調査のまとめとしたい。

居場所支援の今後の課題として3点述べたい。1点目は、地域協働型子ども包括支援においてLFAは何をどこまで引き受け、地域に何をどこまで求めるのか、である。3-2でも触れたように、A地域の喫緊の課題として、「小4小6問題」がある。居場所Xの対象者は小学校1~3年生であり、居場所Yの対象者は中学生以上である。A地域には、小学校4~6年生の居場所は児童館しかないのが現状である。桔梗さんが語っていたように、LFAが拠点を新設したり、居場所Xを拡大することも可能だが、持続可能な支援のためには、地域のニーズをLFAがすべて回収するのではなく、地域の他の機関と協働・分担していく必要がある。

2点目は、利用者と支援スタッフの声を拠点運営にどこまで反映させるか、である。3-1の最後に触れたように、居場所Yの利用者からは、毎日、あるいは週末の開室の希望があった。居場所支援がトップダウンの固定したものではなく、ボトムアップで生成・展開していくものであり続けるためには、現在の利用者のニーズを把握し、それに対応すべく変化し続ける必要がある。他方で、支援者の人数やワーク・ライフ・バランスの観点から、居場所で提供するサービスを拡大し続けることには限界がある。その匙加減が今後の展開の鍵になるだろう。

本調査では、支援スタッフからも、居場所における規範と可能性のせめぎ合いに

ついて語られた。

拠点が居場所を提供するのではなく、あくまでも子どもたちが拠点を居場所にするという観点からすると、子どもたちのニーズにできるだけ応えることが望ましい。すでに各拠点では、それぞれの拠点長の裁量の範囲内で、想定された役割を超えた支援が模索され実現されている。しかし、居場所 X の梶月さんと居場所 Y ボランティアの紫苑さんの語りからは、さらに自由な（子どものニーズに即した）居場所になりうる可能性が示唆されている。

3 点目は、支援スタッフの専門性を実践の中でどのように育んでいくのか、である。すでに何度も述べてきているように、SWer の海棠さんの働きにより、A 地域の各拠点はスムーズに連携が取れるようになってきている。しかし他方で、学習支援拠点 Z の元拠点長の虎杖さんからは、拠点間の情報共有の機会が少ないことが指摘された。学習支援拠点 Z の拠点長と居場所 Y のスタッフを兼ねている芝桜さんが、拠点 Z と居場所 Y の方針の違いに戸惑い、かなり驚きながらも、自身の支援観をアップデートしていたように、拠点間の情報共有の機会は、単に対象となる子どもや家庭の情報を把握するためだけでなく、他拠点の支援の方針や雰囲気に触れて学ぶための機会にもなるはずである。

本調査で印象的だったのが、SWer の海棠さんの多忙さである。海棠さんの入職時には拠点間の連携があまり実現していなかった、という語りからすると、SWer がどのような方針を採るかが、各拠点における支援や地域協働型子ども包括支援の展開に大きな影響を与えることが推察される。このように SWer が重要な役割を果たすからこそ、1 名体制であることは様々な意味でリスクが大きい。1 名ではなく 2 名体制にして、新任 SWer は古参の SWer の働きぶりを学ぶというような、実践の中で学ぶ体制を整える必要があるのではないだろうか。

最後に、本調査の限界について述べたい。本調査では、できる限りなまの現場の雰囲気を知るために、各拠点の見学、ケース会議の傍聴、フードパントリーへの参加、各拠点でのインタビューの実施などを行ってきた。しかし、時間の制約もあり、各人に対するインタビューは 1 回、拠点長と SWer の座談会が 1 回と、限られた聴き取りしかできなかった。利用者インタビューに関しても同様である。各拠点に何度も足を運び、継続したインタビューが実施できれば、各人の語りをもっと深掘りできたと考えられる。3-1 で述べたように、居場所支援を評価するためには、長期的な視野が必要になる。同様に、調査も継続的に実施することで、拠点での支援に関する支援者と利用者の考え方や受け止め方の変化を追うことができる。地域協

働型子ども包括支援に関しても、これからの展開を追うことができる。こうした継続調査については、本研究の今後の課題としたい。